

難読地名の読みと由来

日本国内版

北海道編

東北・北陸編



上総の国いちはらの歴史を知る会

日本国内の地名は、有史以来に付いたものや、地域の統廃合などの都合で命名された地名があります。そしてその地名は素直に読める地名と、読めない地名があります。ここでは難読地名を都道府県ごとに選び、その読み方と由来を調べてみました。

北海道編



北海道には、アイヌ語に起因する地域名が多く、当てられた漢字との繋がりのない当て字地名が多い。

番号	地名	よみかた	市町村名	由来
1	茨戸	ばらと	札幌市北区	アイヌ語の「パラ・ト」で、広い沼に由来。
2	簾舞	みすまい	札幌市南区	アイヌ語の「ニセイ・オマプ」で、峡谷があるものに由来。
3	発寒	はっさむ	札幌市西区	アイヌ語の「ハッチャムペツ」で桜島の川、または「ハッサム」で山ぶどうの傍に由来。
4	川汲町	かっくみちょう	函館市	アイヌ語の「カッコ・ク・ニ」でカッコウの居る所に由来。
5	木直町	きなおしちょう	函館市	アイヌ語の「キナ・ウシ」で、蒲の生える所に由来

6	楸法華	とどほっけ	函館市	アイヌ語の「トー・ポク・ケ」で、山の根の下の所に由来するが、行政地名は存在しない。
7	忍路	おしよろ	小樽市	アイヌ語の「オショロ」で尻のような窪み、あるいは「ウス・オ・ロ」で入江の中に由来する。
8	勝納町	かつないちょう	小樽市	アイヌ語の「ヘロキ・アツ・トマリ・ナイ」で、ニシンが群集する入江の川が短縮され、「アツ」が「カツ」に転訛したもの。
9	文庫歌	ぶんかた	小樽市	アイヌ語の「プンカル・コタン」で、憂植物の村に由来。
10	神居古潭	かむいこたん	旭川市	アイヌ語の「カムイ・コタン」で、神の村に由来。
11	雨紛	うぶん	旭川市	アイヌ語の「ウブン」で、吹雪に由来。
12	大楽毛	おたのしけ	釧路市	アイヌ語の「オタ・ノシケ」で、砂浜の中央に由来
13	徹別	てしべつ	釧路市	アイヌ語の「テシ・ベツ」で、蕨（すくも）のある川に由来。
14	弊舞町	ぬさまいちょう	釧路市	アイヌ語の「ヌサ・オマ・イ」で、イナウを捧げる所に由来。
15	馬主来	ばしくる	釧路市	アイヌ語の「パシクル」で、カラスに由来する。
16	相内町	あいのないちょう	北見市	アイヌ語の「アイヌ・ナイ」で人がいる川」に由来
17	留辺蘂町	るべしべちょう	北見市	アイヌ語の「ルペシペ」で、道に沿って下る川」に由来。
18	呼人	よびと	網走市	アイヌ語の「イ・オ・ピト」で、それを捨て去った沼に由来。
19	癸巳町	きしちょう	美唄市	屯田兵の騎兵隊が入植した明治26年の十二支十干に由来する。
20	対雁	ついしかり	江別市	アイヌ語の「トエシカリ」で、沼がそこで回るに由来もしくは「トゥ・イシカリ」で、石狩川の古い流れに由来。
21	野幌	のっぼろ	江別町	アイヌ語の「ヌプ・オル・オ・ベツ」で、野中を流れる川に由来。
22	渚滑町	しょこつちょう	紋別町	アイヌ語の「ソー・コツ」で、滝つぼに由来。
23	奔別町	ほんべつちょう	三笠市	アイヌ語の「ポン・ベツ」で、小さな川に由来。
24	温根沼	おんねとう	根室市	アイヌ語の「オンネ・トー」で、大きな沼に由来。
25	瑤瑤瑁	ごようまい	根室市	アイヌ語の「コイ・オマ・イ」で、波のあるものに由来。
26	納沙布	のさっぷ	根室市	アイヌ語の「ノツ・サム」で、岬の傍らに由来。
27	穂香	ほにおい	根室市	アイヌ語の「ボン・ニ・オ・イ」で、小さい木片の多い所に由来。
28	齒舞	はぼまい	根室市	アイヌ語の「アポ・オマ・イ」で、流水があるものに由来。
29	奥潭	おこたん	千歳市	アイヌ語の「オ・コタン・ウン・ペ」で、川口に村

				があるものに由来。
30	支寒内	ししゃもない	千歳市	アイヌ語の「シサム・ナイ」で、和人の沢に由来。
31	堀美内	ほろびない	千歳市	アイヌ語の「ポロ・ピ・ナイ」で、大きな溜る沢に由来。
32	一巳町	いちゃんちょう	深川市	アイヌ語の「イチャン」で、鮭や鱒が産卵するところに由来。
33	富岸町	とんけしちょう	登別市	アイヌ語の「トー・ケシ」で、沼の端に由来。
34	稀府	まれっぶ	伊達市	アイヌ語の「イマリマレプ」で、イチゴのある所に由来。
35	輪厚	わっつ	北広島市	アイヌ語の「ウツ」であばら骨に由来する。
36	送毛	おくりけ	石狩市	アイヌ語の「ウルク・キナ」で、サジオモダカ・植物に由来する。
37	生振	おやふる	石狩市	アイヌ語の「オ・ヤ・フル」で、尻が陸に付く丘に由来。
38	群別	くんぺつ	石狩市	アイヌ語の「クン・ペツ」で、黒い川に由来。
39	濃昼	ごきびる	石狩市	アイヌ語の「オキピリ」で、川下からそそり立つ崖に由来。
40	聚富	しっぶ	石狩市	アイヌ語の「シュプ」で、箱のような溪谷に由来。
41	発足	はったり	石狩市	アイヌ語の「ハツタル」で、淵に由来。
42	花畔	ばんなぐろ	石狩市	アイヌ語の「パナウンクル・ヤソッケ」で、川下の衆の漁場に由来。
43	幌	ぽろ	石狩市	アイヌ語の「ポロ・クンベツ」で、大きい石の川に由来。
44	正利冠	まさりかっぶ	石狩市	アイヌ語の「マサヲ・カ・オマプ」で、砂丘の草地の上にあるものの由来。
45	望来	もうらい	石狩市	アイヌ語の「モライ」で、遅い流れに由来。
46	安瀬	やすすけ	石狩市	アイヌ語の「ヤ・ソシケ」で、網で漁をする所、あるいは「ヤン・ソシケ」で、陸に上がる剥げた崖に由来。
47	弁華別	べんけべつ	石狩郡別当町	アイヌ語の「ペンケ・チプ・ベシ・ナイ」で、川上側の丸木舟がそれに沿って下る川に由来。
48	軍川	いくさがわ	亀田郡七藩町	アイヌ語の「イ・クサ・プ」で、それを越させる者、渡し守に由来。
49	長万部	おしゃまんべ	山越郡	アイヌ語の「オ・サマム・ペツ」で、川尻が横になっている川に由来。
50	国縫	くんぬい	山越郡	アイヌ語の「クンネ・ナイ」で、黒い川に由来。
51	小砂子	ちいさご	桧山郡	アイヌ語の「チシ・ムコ」で、立岩の水源に由来
52	厚沢部	あっさぶ	桧山郡	アイヌ語の「ハッチャム・ペツ」で、桜島の川に由来
53	美利河	ぴりか	瀬利郡	アイヌ語の「ピリカ・ペツ」で、美しい川に由来。
54	買取潤	かいとりま	久遠郡	アイム語の「カイエ・ウトウル」で、折岩の間に由来。

55	歌棄町	うたすつちよう	寿都郡	アイヌ語の「オタ・スツ」で、砂浜の根本に由来。
56	千走	ちわせ	島牧郡	アイヌ語の「チウ・アシ」で、波立つ所に由来。
57	寿都	すつつ	寿都郡	アイヌ語の「シュプト・ペツ」で、ヨシの川に由来
58	熱郭	ねっぶ	寿都郡	アイヌ語の「クンネ・プ」で、黒いものに由来。
59	真狩	まっかり	虻田郡	アイヌ語の「マク・カリ・ペツ」で、奥で曲がる川に由来。
60	倶知安	くっちゃん	虻田郡	アイヌ語の「クチャ・アン・ナイ」で、小屋のある川、あるいは「クツ・サム・ワン・ペツ」で、崖の傍らにある川に由来。
61	梨野舞内	りやむない	岩内郡	アイヌ語の「リヤム・ナイ」で、年を越す川に由来
62	堀株村	ほりかっぶむら	古宇郡	アイヌ語の「ホロカ・プ」で、後戻りするものに由来
63	神恵内村	かもえないむら	古宇郡	アイヌ語の「カムイ・ナイ」で、神の川に由来。
64	積丹	しゃこたん	積丹郡	アイヌ語の「サク・コタン」で、夏の村に由来。
65	然別	しかりべつ	余市郡	アイヌ語の「シ・カリ・ペツ」で、回る川に由来。
66	南幌	なんぼろ	空知郡	アイヌ語の「ポロ・モイ」で、幌向で大きな川の曲がりの」南部に位置する事に由来。
67	晩生内	おそきない	樺戸郡	アイヌ語の「オ・ショシケ・ナイ」で、川尻が崩れている川に由来。
68	留久	るうく	樺戸郡	アイヌ語の「ル・ケツ・ペツ」で、道が通る川に由来
69	妹背牛	もせうし	雨竜郡	アイヌ語で「モセ・ウシ」で、イラクサの生える所、あるいは草刈りをする所に由来。
70	秩父別	ちちぶべつ	雨竜郡	アイヌ語の「チエプ・ペツ」で、魚の川あるいは「チ・クシ・ペツ」で、我ら通る川、「チプ・クシ・ペツ」で、舟が通る川に由来。
71	比布	びっぶ	上川郡	アイヌ語の「ピピペツ」で、石のゴロゴロしている川、あるいは「ピオプ」で、石の多いものに由来。
72	勇駒別	ゆこまんべつ	上川郡	アイヌ語の「ユ・コ・オマン・ペツ」で、湯に向かう川に由来。
73	占冠	しむかっぶ	勇払郡	アイヌ語のシ・ムカプ」で、鵜川の本流より。川はアイヌ語の「ムッカ・ペツ」で、塞がる川、あるいは「ムカプ」でツルニンジンのある所。
74	苫務	とまむ	勇払郡	アイヌ語で「トマム」で、湿地に由来。
75	和寒	わっさむ	上川郡	アイヌ語の「アツ・サム」で、オヒョウの傍らに由来
76	美羽鳥	びばかるうし	上川郡	アイヌ語の「ピパ・カル・ウシ」で、カラス貝を取る所に由来。
77	音威子府	おといねっぶ	中川郡	アイヌ語の「オ・トイネ・プ」で、川尻が汚れている所に由来。
78	咲来	さっくる	中川郡	アイヌ語で「サク・ル」で、夏の道に由来。
79	母子里	もしり	雨竜郡	アイヌ語の「モシリ・ウン・ナイ」で、島がある川に由来。

80	信砂	のぶしゃ	増毛郡	アイヌ語の「ヌプ・サ・ペツ」で、野傍の川より。
81	天売	てうり	苫前郡	アイヌ語の「テウレ」で、魚の背腸、あるいは「チエウレ」で、足に由来。
82	焼尻	やぎしり	苫前郡	アイヌ語の「ヤンケ・シリ」で、水揚げする島より
83	雄信内	おのぶない	天塩群	アイヌ語の「オ・ヌプ・ウン・ナイ」で、川尻に原野がある川に由来。
84	振老	ふらおい	天塩群	アイヌ語の「フラ・ウエン・い」で、臭いの悪い所に由来。
85	敏音知	びんねしり	枝幸郡	アイヌ語の「ピンネ・シル」で、男の山に由来。
86	江刺	えさし	枝幸郡	アイヌ語の「エサシ」で、岬に由来。
87	活汲	かっくみ	網走郡	アイヌ語の「カックム」で、柄杓に由来。
88	止別	やむべつ	斜里郡	アイヌ語の「ヤム・ペツ」で、冷たい川に由来。
89	訓子府	くんねっぷ	常呂郡	アイヌ語の「クンネプ」で、黒いものに由来。
90	富武士	とっぶし	常呂郡	アイヌ語の「トプ・ウシ」で、竹が群生しているものに由来
91	丸瀬布	まるせっぷ	紋別郡	アイヌ語の「マウレセプ」で、3つの川の集まる広い所に由来。
92	札久留	さっくる	紋別郡	アイヌ語の「サク・ル」で、夏の道に由来
93	興部	おこっぺ	紋別郡	アイヌ語の「オ・ウ・コツ・ペツ」で、川尻が互いにくっつくものに由来。
94	雄武	おうむ	紋別郡	アイヌ語の「オ・ム」で、川尻が塞がるに由来。
95	礼文華	れぶんげ	虻田郡	アイヌ語の「レブン・ケ・プ」で、沖の先へ削るものに由来。
96	壮瞥	そうべつ	有珠郡	アイヌ語の「ソー・ペツ」で、滝の川に由来。
97	平取	びらとり	沙流郡	アイヌ語の「ピラ・ウトウル」で、崖の間に由来
98	貫気別	ぬきべつ	沙流郡	アイヌ語の「ヌプキ・ペツ」で、濁り水の川に由来
99	新冠	にいかっぷ	新冠郡	アイヌ語の「ニカプ」で、木の皮に由来
100	月寒	つきさっぷ	浦河郡	アイヌ語の「チキサニ」で、ハルレニに由来
101	西舎	にしちゃ	浦河郡	アイヌ語の「ニチャ」で、木を伐るに由来。
102	染退	しぶちゃり	日高郡	アイヌ語の「シペツ・チャリ」で、鮭の産卵場・「シペ・イチャン」・「シペツ・イチャニ」で、本流が散らばるなどの諸説ある。
103	鳧舞	けりまい	日高郡	アイヌ語の「ケリマプ」で、履物を焼く所に由来。
104	音更	おとふけ	河東郡	アイヌ語の「オトプケ」で、髪が生ずる所に由来。
105	長流枝	おさるし	河東郡	アイヌ語の「オ・サルシ」で、川尻に茅原が多くある川に由来。
106	居辺	おりべ	河東郡	アイヌ語の「ウル・ペツ」で、丘の川に由来。
107	屈足	くったり	上川郡	アイヌ語の「クッタラ・ウシ」でイタドリの群生する所に由来。
108	雄馬別	おまべつ	河西郡	アイヌ語の「オマン・ペツ」で、山の方に行く川に

				由来。
109	更別	さらべつ	河西郡	アイヌ語の「サラ・ペツ」で、アシ・カヤが生い茂る地に由来。
110	生花苗	おいかまない	広尾郡	アイヌ語の「オйка・オマ・ナ」で、波が超えてくる川に由来。
111	萌和	もいわ	広尾郡	アイヌ語の「モイワ」で、小さな聖なる山に由来。
112	音調津	おしらべつ	広尾郡	アイヌ語の「オ・シララ・ウン・ペツ」で、川尻に岩のある川に由来。
113	白人	ちろっと	中川郡	アイヌ語で、「チロ・ト」で、鳥の沼に由来。
114	利別	としべつ	中川郡	アイヌ語の「ツシ・ペツ」で、縄の川に由来。
115	旅来	たびこらい	中川郡	アイヌ語の「タップコプ・ライ」で、瘤のような山の近くの、流れのない川に由来。
116	農野牛	のやうし	中川郡	アイヌ語の「ノヤ・ウシ」で、蓬（よもぎ）の多い所に由来。
117	押帯	おしょっぷ	中川区	アイヌ語の「オ・シュップ」で、川尻の箱のような溪谷に由来。
118	負箆	おふいびら	中川郡	アイヌ語の「ウファイ・プラ」で、燃える崖に由来。
119	勇足	ゆうたり	中川郡	アイヌ語の「エ・サン・ピタラ」で、頭が浜の方に出ている川原に由来。これに「勇足」を当てて「エサンピタラ」と読ませたが難読なので「ゆうたり」と読み替えられた。
120	足寄	あしよろ	足寄郡	アイヌ語の「エシヨロ・ペツ」で、沿って下る川に由来。
121	愛冠	あいかっぷ	足寄郡	アイヌ語の「アイカプ」で、矢が届かないに由来。
122	大誉地	およち	足寄郡	アイヌ語の「オ・イ・オチ」で、川のそばに「それ」の多い所に由来。
123	螺湾	らわん	足寄郡	アイヌ語の「ラウ・アン」で、低い所に由来。
124	鷺府	わしっぷ	足寄郡	アイヌ語の「ワ・シップ」で、由来は不明
125	斗満	とまむ	足寄郡	アイヌ語の「トマム」で、湿地に由来。
126	勲称別	くんねべつ	足寄郡	アイヌ語の「クンネ・ペツ」で、黒い川に由来。
127	止若内	やむわっかない	足寄郡	アイヌ語の「ヤム・ワッカ・ナイ」で、冷たい水の川に由来。
128	鼈奴	べっチャロ	十勝郡	アイヌ語の「ペツチャロ」で、川の口に由来
129	跡永賀	あとえか	釧路郡	アイヌ語の「アトウイ・カ」で、海の上、または「アイ・オカケ」で、海の跡に由来。
130	老者舞	おしゃまっぷ	釧路郡	アイヌ語の「オ・イチャン・オマプ」で、川尻に鮭鱒が卵を産む所に由来。
131	来止臥	きとうし	釧路郡	アイヌ語の「キト・ウシ」で「ギョウジャンニクがある所」に由来。
132	賤夫向	せきねっぷ	釧路郡	アイヌ語の「チェエプヌルンゲプ」の樹木の少ない

				山で、石落ちる所に由来。
133	初無敵	そんてき	釧路郡	アイヌ語の「ト・ウン・テク」で、沼のあるように由来。
134	知方学	ちっぼまない	釧路郡	アイヌ語の「チプ・オマ・ナイ」で、舟のある川に由来。
135	重蘭窮	ちぶらんけうし	釧路郡	アイヌ語の「チプ・ランケ・ウシ」で、舟下ろしをする所に由来。
136	入境学	にこまない	釧路郡	アイヌ語の「ニ・オマ・ナイ」で、流木のある川に由来。
137	冬窓床	ぶいま	釧路郡	アイヌ語の「プイ・モイ」で、穴の開いた岩のある入江に由来。
138	又飯時	またいとき	釧路郡	アイヌ語の「ワッカ・タ・エトク」で、水を汲む源に由来。
139	分遺瀬	わかちゃれせ	釧路郡	アイヌ語の「ワッカ・チャラ・セ」で、水がチャラチャラ音をさせるに由来。
140	厚岸	あっけし	厚岸郡	アイヌ語の「アッケ・ウシ」で、オヒユの木の皮を剥ぐ所に由来。
141	片無去	かたむさり	厚岸郡	アイヌ語の「カタム・サル」で、ツルコケモモのある湿原に由来。
142	別寒辺牛	べかんべうし	厚岸郡	アイヌ語の「ペカンペ・ウシ」で、ヒシのある所に由来。
143	奔渡	ぽんと	厚岸郡	アイヌ語の「ポン・ト」で、小さな湖に由来。
144	未広	まびろ	厚岸郡	アイヌ語の「マウ・ピロロ」で、風影の所に由来。
145	羨古丹	うらこたん	厚岸郡	アイヌ語の「ウライ・ヤ・コタン」で、築網の村に由来。
146	恵茶人	えさしと	厚岸郡	アイヌ語の「エサワシ」で、頭を浜につけている沼に由来。
147	暎暮帰	けんぼっけ	厚岸郡	アイヌ語の「ケネ・ポク」で、ハンノキの下に由来
148	後静	しりしず	厚岸郡	アイヌ語の「シリ・スツ」で、山の根本に由来。
149	仙鳳趾	せんぼうじ	厚岸郡	アイヌ語の「チャッポ・オツ」で、小魚がいる所に由来。
150	散布	ちりっぷ	厚岸郡	アイヌ語の「チュルプ」で、あさり貝に由来。
151	貰人	もうらいと	厚岸郡	アイヌ語の「ポン・モイレ・モイ」で、小さな静かな湾に由来。
152	標茶	しべちゃ	川上郡	アイヌ語の「シ・ペツ・チャ」で、大きな川の岸に由来。
153	茶安別	ちゃんべつ	川上郡	アイヌ語の「チャ・アン・ペツ」で、岸の川に由来
154	弟子屈	てしかが	川上郡	アイヌ語の「テシ・カ・カ」で、築の岸の上に由来
155	跡佐登	あとさのぼり	川上郡	アイヌ語の「アトウサ・ヌプリ」で、裸の山に由来
156	屈斜路	くっしゃろ	川上郡	アイヌ語の「クツチャル」で、沼の喉口に由来。

157	鑑別	とうべつ	川上郡	アイヌ語の「ト・ペツ・クシ」で、二つに分かれる川に由来。
158	最栄利別	もえりべつ	川上郡	アイヌ語の「モイレ・ペツ」で、名狩りの遅い川に由来。
159	雪裡	せつり	阿寒郡	アイヌ語の「セツ・チリ・ウイ・イ」で、巣・鳥の多い所に由来。
160	御札部	オサツペ	白糖郡	アイヌ語の「オ・サツ・ペ」で、川尻が枯れている所に由来。
161	標津	しべつ	色丹郡	アイヌ語の「シ・ペ」で、大きな川に由来。
162	色丹	しこたん	色丹郡	アイヌ語の「シ・コタン」で、大きな村に由来。
163	紗那	しゃな	紗那郡	アイヌ語の「シャン・ナイ」で、下る川に由来。
164	薬取	しべとろ	薬取郡	アイヌ語の「シ・ペツ・オロ」で、大きい川の所に由来。

制作・編集にあたり、インターネットの「ウィキペディア」及びA Iデータを活用して作成しています。

参考文献 インターネット

○ 榊原正文「データベース アイヌ語地名2石狩Ⅰ・Ⅱ・

「アイヌ語地名釣歩記—北海道のエコ・ツーリズムを考える」

○ 山田修造「北海道の地名」 北海道新聞社1984年

東北地方編

NO	地名	読み方	由来
1	後苑	うしろやち	青森市・外ヶ浜の苑（谷地・湿地）の後方に由来。
2	王余魚沢	おおあざかれいさわ	青森市・中国の故事に由来。王様が魚を食べて半分残して放したら、半分で泳いでいったという伝説に由来。



3	博奕打ヶ沢	ばくいちがさわ	青森市・恐山資料に由来。
4	雲谷	もや	青森市・アイヌ語の「モイワ」で、小高い山に由来。
5	合浦	がっぼ	青森市・戦国期からある地名。津軽地方の北部を上磯、東部を下磯と2つに分けた時の接合点を合浦と称した。
6	狼森	おいのもり	弘前市・小岩井農場の敷地内にある小高い山の地名で、狼がいる森という意味。
7	小比内	さんびない	弘前市・アイヌ語の「サツ・ピ・ナイ」で、乾いた石の川辺に由来。
8	撫牛子	ないじょうし	弘前市・アイヌ語の「ナイ・チャシ」で、川の沢の砦または柵に由来。
9	泥障作	あおづくり	八戸市・泥障とは馬具の一種で、馬の横腹を覆い、馬が蹴り上げた泥を防ぐための道具で、江戸時代にはあった。
10	徒士町	かちしちょう	八戸市・徒歩で使える武士に由来。
11	上盲久保	かみめくぼ	八戸市・上（下）盲久保があり、久保がくぼんだ場所に由来。
12	田面木	たものき	八戸市・タモの木に由来。江戸時代に地名はあった。
13	不習	ならわず	八戸市・由来については不明
14	一日市	ひといち	八戸市・以前毎月1日に市場が開かれていた事にちなむ。
15	不魚住	うおすまず	五所川原市・藩政当時の地名で、「水清ければ魚住まず」の歌の通りで、きれいな小川があった事に由来か。
16	十三五月女菴	じゅうさんそとめやち	五所川原市・かつてはアヤメの群生する低湿地から着いた地名で、「女菴」はアヤメを指す。
17	三本木中掬	さんぼんぎちゅうせり	十和田市・三本木の由来は、昔この地に根が3つある木があり、それが由来という。中掬は、6200年前に噴火して出来た軽石を「中掬軽石」と呼んでいた事に由来。
18	木野部	きのつぶ	むつ市・「キノツブ」はアイヌ語で「カヤを刈る所」という意味
19	九艘泊	くそうどまり	むつ市・時化の時に十艘中九艘が泊まった事に由来する。
20	太田光	おおたっぴ	つがる市・近くの「田光沼」に由来の地名・
21	三厩鉞泊	みんまやさかりどまり	東津軽郡・三厩の地名は、義経伝説に由来し、東北に逃れた源義経が岩窟にいた3頭の駿馬を得てここから北海道に渡ったという伝説による地名で、鉞泊は地形が「まさかり」に似ていたのでこの地名が付いたという。
22	三厩栴檀	みんまやひょうろう	東津軽郡・三厩の地名の由来は、義経伝説に由来、栴檀の由来は、読みは「びろう」でヤシ科の常緑樹。
23	三厩東風泊	みんまやませどり	東津軽郡・三厩の地名の由来は、義経伝説に由来、東風泊の由来は、東風が強い時に舟を止める港に由来。
24	鴟島	ごめじま	東津軽郡・カモメが多く生息する島に由来。
25	風合瀬	かそせ	西津軽郡・この地域の海上から東西に吹く風の交差点にあった事に由来。
26	麤木	とどろき	西津軽郡・由来は、花山天皇（968～1008）が譲位後この地を通過した際に、従者の馬3頭が暴れ出したのを見て、斗

			斗口木を轟木にせよと言われて改めたという。
27	舩作	へなし	西津軽郡・奈良時代の初めに、渤海国の使者を乗せた船の鍛冶が壊れこの地に漂着し、破損した船を修理して無事に帰った事から着いた地名。
28	小泊嗽沢	こどまりうがいさわ	北津軽郡・荒川鉦山附近を言い、将軍が荒川の清流をもって口を漱ぎ、朝食をとった所を言い、このことから「ウガイ沢」と命名された事が由来。
29	听	さそう	上北郡・どこそこに以降と「誘う」が語源という。
30	治部袋	じんば	上北郡・治部に続く「袋」は「袋小路」で、これ以上行けないという意味から。
31	犬落瀬	いぬおとせ	上北郡・長慶天皇が六戸郷の里に入った、一匹の白い犬が里の川（相坂川）で溺死してしまい、天皇はこの犬を哀れみ「犬落瀬の里」と命名したという伝承に由来。
32	百目木	ぢめき	上北郡・堂々と流れる水の音を形容したものが由来。
33	大豆田	まめだ	上北郡・東北地方に多い地名で、大豆の生産が盛んな事に由来する。
34	数牛	かそし	上北郡・アイム語で「ウシ」は場所に由来する。
35	枋木	こぼのき	上北郡・「こぼのき」という樹木に由来。
36	水喰	みずはみ	上北郡・「ハム」とは、「噛む」という原意がありますが、ここでは地形が十分に水分を含むという意味。水の豊富な湿地帯に由来。
37	尾駁	おぶち	上北郡・由来は、馬の尾が駁（まだら）になっているので「尾駁（おぶち）となったという。
38	鷹架	たかほこ	上北郡・由来は、身丈が鷹待場の架のようだったので「鷹架」と呼ばれた。
39	瓢	ふくべ	上北郡・由来は不明。「ふくべ遺跡」がある。
40	奥戸	おこっぺ	下北郡・興部側と藻興部川が合流してオホーツク海に注いでいたことから、アイヌ語がなまって「オコッペ」の地名になった
41	鹿橋	ししばし	下北郡の小字・由来は不明。
42	尻労	しつかり	下北郡・由来はアイヌ語で、シル（地面・土地・山）ト（トウ）かり（の手前）の意味で、山の手前の意味。
43	易国間	いこくま	下北郡・由来は、古くは蒙古などから軍馬などを購入したことがあり、これらの輸送船が入津していた事から「異国の潤」とも呼ばれた、それが後に「易国間」に改めたという説がある。
44	毒久保	ぶすくぼ	三戸郡の小字・毒のあるトリカブトの根を「附子（ブス）」と呼ぶことから、毒（ぶす）と言い、「久保」は窪地で狭い土地で、トリカブトが生える地に由来。
45	田子	たっこ	三戸郡・由来は、この地の先住民であるアイヌ人の言葉で、「小高い丘」を意味する「タプコプ」からきているという説がある
46	坩渡	ごみわたり	三戸郡・由来は、渡し船で乗り降りする際に挨拶をする事を

			「挨渡し」と言い、それが転訛して「塚渡」となったという説と、かつては「塚」は食物の「グミ」を表す漢字で、それがなまって「ごみ」となったという説がある。
47	狐平	きつねびら	三戸郡の小字・以前に狐が生息していた事に由来する。
48	妻神沢	さいのかみさわ	三戸郡の小字・由来については不明。
49	苔米地	とまべち	三戸郡・由来は「と」+「まべち」説と、アイヌ語で「マ」は船着き場のことで、「ベチ」は川のこと。従って「マペチ」とは川の船着き場という意味になる。
50	水開	みずかい	三戸郡の小字・由来は不明。
51	盲転	めくらころばし	三戸郡の小字・由来は不明。
52	小舟渡	こみなと	三戸郡の小字・由来は、小舟の渡場で「こくなと」が転訛して「こみなと」となったという。
53	階上	はしかみ	三戸郡・由来は、明治22年の市制町村制施時に「階上岳」の山名にちなんで命名された。
54	耳ヶ吠	みみがほい	三戸郡の小字・由来は、大蛇の耳を削いだ場所という説がある
55	平佐窪	へさくぼ	三戸郡・平佐の由来は不明ですが「窪」という地域は狭い土地窪地という意味です。
56	狼子沢	おいのこざわ	三戸郡の小字・由来は、その昔オオカミが集まったことから「狼沢（おいぬさわ）」や、この沢に入って帰ってくるものがいなかった事から「帰らずの沢」と呼ばれていた。
57	五百窪	いおくぼ	三戸郡・由来については不明。
58	皂窪	さいかちくぼ	三戸郡の小字・「皂」の意味については「かんばしい」・「かぐわしい」・「良いにおい」などがある。このような意味から「良いにおいのする窪地が由来か。

NO	地名	読み方	由来
1	雷田	いかだ	盛岡市の小字・盛岡市乙部の小字で、集落が高地にあり、雷が鳴ると特に大きく聞こえるので地名の由来となった。
2	神子塚	いたこずか	盛岡市の小字・由来については不明。過去の出来事やそこに暮らしていた人々の生活や信仰などが関係していると思われる。
3	大ケ生	おおがゆう	盛岡市・南部に位置する陸中国紫波郡大ケ生村がルーツという
4	金洗	かならい	盛岡市の小字・由来については不明。
5	北畑	きたばたち	盛岡市の小字・由来は、地域の北にある畑（土地）から着いた
6	厨川	くりやがわ	盛岡市・古くは栗屋川と藻と表した。由来には神社・仏閣の台所でその側に川が流れていた説と、古代陸奥国の豪族の阿部氏の根拠地で「厨川柵」があった事に由来する説がある。
7	儉断地	けだじ	盛岡市の小字・元は「検察」と「断獄」を合わせた語で、不法行為を検察してその不法を糾弾するなどして「断獄（罪を裁くこと）」をした土地を意味する。
8	不来方	こずかた	盛岡市・不来方は、伝承によると「二度と来ない方向」の意味で、かつてこの地に「羅刹」という鬼が人里を荒らしていたところ、三ツ石神社の神が鬼を捕らえ、二度と来ない証として岩に手形を残した事に由来する。
9	牛尾草久保	そでくぼ	盛岡市・由来については不明ですが、「久保」や「窪」という地名は地形的に谷間や凹地になっている場所が多い。
10	遠目鏡森	とおめがもり	盛岡市の小字・地名の由来は不明。
11	生畔	なまぐろ	盛岡市の小字・「畔」は、水田と水田の境を区切る土手や道のことで、そのためについた地名と思われる。
12	夏焼	なやぎ	盛岡市の小字・由来は、夏に日焼けの害を起こしやすい土地。
13	早俄上	さおのがみ	盛岡市の小字・地名の由来は不明。
14	八卦	はっけ	盛岡市の小字・由来は、女性の袷（あわせ）着物や綿入れの裾や袖口の裏に付けられる生地のもので、元々は「おくみ・前身頃・後身頃・襟先」を左右に二枚ずつ合計8枚に裁って使われる事から「八」の字が名前に含まれている。
15	半在家	はんざけ	盛岡市の小字・「半在家」とは、江戸時代において、かつて町人だった人々が困窮し、生活を細々と送っている状態を指し、そのような人々が住んでいた事から着いた地名と思われる。
16	級沢	まださわ	盛岡市・由来については直接的な歴史的背景は不明。「沢」という言葉は、水源や水辺に関連した地名と思われる。
17	大豆門	まめかど	盛岡市の小字・由来については不明ですが、地形や農産物、あるいは音に由来する可能性が考えられる。
18	上米内	かみよない	盛岡市・由来には複数あり、アイヌ語説では「そこに熊が出る沢」という説と、「ヨブナイ」が語源で「首長集落の沢」という説、「イオナイ」（あれが居る沢）が転じて「ヨナイ」とな「あれ」は蛇を指すため「蛇の居る沢」という意味とされている。

			「ヨナイ」は「神が多くいる沢」に由来する説もあり。
19	江繫	えつなぎ	宮古市・由来の特定はできません。
20	上鼻	かんばな	宮古市・「鼻」の着く地名の由来は、地形が突き出ている、特定の端を指したりする場合にもちられる事が多い。
21	女遊戸	おなつべ	宮古市・アイヌ語の「オナツベ」が由来で、「川の末端の方が切れているもの」という意味で、この地には普段枯れている小さな川があり、その地形が由来となっている。
22	重茂	おもえ	宮古市・由来については複数あり、アイヌ説と若者宿の一種である女宿に由来する説がある。古くは、鎌倉時代から集落があったという。
23	花原市	けばらいち	宮古市・明確な由来は見つかりませんが、宮古市の西部に位置し、閉伊川の北岸に位置し、渡河が困難な際の閉伊街道の脇街道が通っている地域。また、当地に閉伊各地から牧馬を集めて馬市を開いたものから、「花原」の地名も「毛原市」によったものと思われる。
24	磯鷄	そけい	宮古市・由来には複数あり、伝説によると高貴な人物が海で溺れ死んだ際、磯で鳥が鳴いて知らせた事から「磯鷄」という地名になった説と、古来の表記「曾計比」の転訛で「磯鷄」となった説、地形の浸食により削り落ちた土地を意味する「削（そぎ）が転訛した説やアイヌ語の「ソ・ケ」が語源で「磯岩の所」という意味もある。
25	鮭ヶ崎	とどがさき	宮古市・明確な由来は不明ですが、本州最東端に位置する事から、「とどのつまり」（「とど」は成長して名前が変わる魚の「ぼら」の最後の名前）と関連があるのではないかと思われる
26	墓目	ひきめ	宮古市・由来は、肥沃な耕作地に適した低地に開けた集落で、「墓」は疋（ひき）と同義で、肥沃な土地を意味する。
27	袋屋	ほろや	宮古市・由来は、アイヌ語の「ポロ（大きな）」に由来し、苗字としても全国に150人おり、岩手県に100人存在する
28	袋帯	ほろたい	宮古市・アイヌ語の「ポロ（大きな）」という意味があり、地形にちなむ地名と思われるが、現在「袋帯」という地名は無く「袋野」の可能性もある。
29	越喜来	おきらい	大船渡市・由来は、主に坂上田村麻呂による蝦夷征伐の際の「鬼」伝説に由来すると伝えられている。元々は「越鬼来」と書かれ「鬼が喜んで来た」という意味や、坂上田村麻呂が鬼を追ってこの地まで来たという説に由来する。
30	水鷄島	くいなじま	大船渡市の小字・無人島で、地名の由来は不明。
31	二本柰	にほんどう	大船渡市の小字・由来には諸説あり、主に岩手山によって形成された地形説と、鬼の伝説に由来する説がある。
32	舞良	もうりょう	大船渡市の小字・地名の由来については不明。
33	砂子前	ゆなごまえ	大船渡市の小字・地名の由来については不明。

34	轆轤石	ろくろいし	大船渡市の小字・「轆轤」が回転する台を意味し、その地にあるように見える独特な形状の石があったとので「轆轤石」とつけられたと思われる。
35	上代	わんだい	大船渡市の小字・地名の由来は不明。
36	合足	あったり	大船渡市の小字・語源はアイヌ語に由来という。
37	大迫	おおさこ	花巻市・「迫」という地名は、狭い谷間や奥まった平地を指す言葉で、地形的な特徴を表す地名。
38	鳥喰	とりばね	花巻市の小字・明確な由来は不明ですが、「喰」の字が使われる地名は何かを「喰らう」行為や地形に関連したもの。
39	蒔田	なもみだ	花巻市の小字・由来については不明。
40	林光田	りごだ	花巻市・地名の由来は、光林寺の創建時に現れた不思議な光にちなむ。
41	夏油	げどう	北上市・アイヌ語の「グット・オ」（崖のあるところ）が転じた地名。
42	比久尼沢	ひくりざわ	北上市の小字・地名の由来については不明。
43	北霊霊	きたほうりょう	北上市・伝説上で登場する地名と思われる。
44	六日市	むよかいち	北上市・かつて六日に定期的に市が開かれていた事に由来。
45	柳上	ようしゅう	北上市の小字・由来は、柳の木が植えられている地域の高台と言った地形に由来する。
46	女供	おなども	久慈市・戦国時代の戦により、その土地に女性と子供しか残らなかった土地であったという伝承に由来。
47	麦生	むぎょう	久慈市・麦の栽培が盛んに栽培されていた事に由来。
48	安居台	あおだい	遠野市の小字・由来は、東禅寺の僧がこの地で安居（あんご）を行った事に由来する。
49	小原田	こうらだ	遠野市の小字・「小原田」という地名は岩手県に複数あるが、由来等については、小さな原野を意味し「田」は開墾された土地や水田を指し、水資源が豊かな土地であったと思われる。
50	蕪沢	こごみさわ	遠野市の小字・この地名の由来は不明。
51	塚淵	ごみぶち	遠野市の小字・明確な由来はありませんが、渡し船に乗り降りする際に挨拶を交わした事から「挨拶渡し」と呼ばれ、それが変化して「塚渡し」となり、現在の「塚渡」になったという説と、「塚」はゴミを表す漢字で、それがなまって「ごみ」という読みになったという説がある。
52	塚川目	ごみかめ	遠野市の小字・由来は「ゴミの木に関係する川辺の地域という意味合いを持つ可能性が考えられる。
53	上榆木	かみたものき	遠野市の小字・由来は、この地にニレの木が茂っていたことに由来する。東北地方では、ニレの木を「タモギ」や「タモノキ」と呼ぶ方言がある。
54	拾戸	じゅうのへ	遠野市・かつて南部氏の10番目の領地を意味する「拾戸（とのへ）」と呼ばれていた。「戸」の着く地名は諸説あり、牧場説

			(牧場の入り口に木戸があったから)・行政区分設「糠部(ぬかのぶ)」と呼ばれる広大な地域を九つの地区に分け「戸」が「～地区」を意味した説、防衛施設説「蝦夷(えみし)」平定の際に設置された守備兵の駐屯地(柵戸)に由来する説。
55	清水	すじ	遠野市の小字・岩手県には「すず」と呼ばれる湧き水が多く存在し、「すずは「清水(しみず)」が変化したのが由来。
56	田下	たんげ	遠野市の小字・由来は、地形から水田などの耕作地の下側という意味。
57	且の鼻	だんのはな	遠野市の小字・この地名が地形的特徴を示すかは不明ですが、「鼻」という漢字がついていることから、海岸線から突き出た地形の岬などの突出部を指す事が多い。
58	附馬牛町	つきもうしちょう	遠野市・この地名は、小倉の稲荷神社にある槻(つき)の巨木の下で多くの牛馬を放牧した事に由来する。
59	馬通田	まかいだ	遠野市の小字・由来は不明ですが、馬にまつわる地名。
60	大豆畑	まんばた	遠野市の小字・由来は、大豆の採れる畑。
61	蓮畑	ゆうばた	遠野市の小字・由来は、「ハスの畑」を意味する。
62	湧口	わっくち	遠野市の小字・岩手県には多くの清水があり、由来は清水の湧口からで「豊富な湧き水がある場所」です。
63	上台	わんだい	遠野市の小字・由来については不明。
64	赤荻	あこおぎ	一関市・由来については不明ですが、「赤荻村」は古くから存在し、寛永年間にまで遡ります。
65	丑子淵	うすこぶち	一関市の小字・直接的な由来は不明ですが、「淵」は水辺の地形に由来するもの。
66	卯南田	うなんだ	一関市の小字・語源は「撓(た)わの畑」を意味し、盆地の畑を指しという説が由来。
67	運適	うんなん	一関市の小字・地元の運適神社にまつわる伝承が由来する可能性が高い。この神社は、元禄年間に落雷が三度続き、住民が神の祟りを恐れて「軻遇突智命(かぐつちのみこと)を祀った事が始まりという。
68	大宝城	おおぼき	一関市の小字・由来は、明確なものはありませんが、昔「大宝城」があったと思われる。茨城県にも同名の地名がある。
69	紙生里	かみあがり	一関市の小字・由来は、平安時代末期にこの地で日本初の和紙製造が行われて居た事に由来する。
60	川崎町門崎	かわさきちょう かんざき	一関市・由来は「門(かん)は、断崖、川岸の意味。そういう地形の先に開けた土地に集落があったことにちなむ。
61	北十軒街	きたじゅっけん こおじ	一関市・由来は、集落の北側に十軒の家があった事にちなむ
62	口袋	ぐず	一関市の小字・鬼伝説・地形・アイヌ語などの関連地名。
63	櫛	くぬぎ	一関市の小字・由来は「櫛(くぬぎ)の木が自生する地域。
64	熊ノ垣内	くまのかきうち	一関市の小字・由来については不明。

65	越河	こすご	一関市の小字・岩手県にはこの地名の由来はないが、宮城県に同地名があります。
66	桜街	さくらこうじ	一関市・岩手県にはこの地名がないが、桜にまつわる地名が多く存在する。
67	四度花山	しどげやま	一関市の小字・この地名の由来は不明。
68	下忽滑沢	しもぬかりざわ	一関市の小字・由来は、昔この地が柔らかくぬかるみやすい場所、切った竹を馬で運ぶ際に滑った事に由来する。
69	宿通向	しゅくのかようむかい	一関市の小字・地名に「宿」と「通」という文字が入っていることから街道や通りに宿場があった事による地名か。
70	躑躅	つつじ	一関市の小字・由来は、ツツジが多く自生していた事に由来
71	尖の森	とがりのもり	一関市の小字・地名の由来は不明。
72	櫛	とや	一関市の小字・地名の由来は不明。
73	唱石	なるいし	一関市の小字・地名の由来は不明。
74	架場	はせば	一関市・地名の由来は不明。
75	櫃輪田	ひつわだ	一関市の小字・撓（たわんだ）輪の畑や田を意味し、盆地にある畑に由来する。
76	古川	ふか	一関市の小字・かつてこの地域を流れていた川の川筋に由来。
77	百連畑	ほろばたけ	一関市の小字・畑が多く連なっている地が由来。
78	雪洞	ぼんぼり	一関市の小字・由来は不明ですが、雪洞には2つの意味がある 1・ひな祭りの装飾品の小型の照明器具で「ほんのり」が転じた説と、2・雪山で風を避けるために雪を掘って作る穴や貯蔵施設を指す場合がある。
79	祭時	まつるべ	一関市の小字・由来は「神を祀る場所」という意味か、アイヌ語で縄文時代の祭礼の場所を意味する。
80	融実 	ゆのみ	一関市の小字・地名の由来は不明。
81	魚集	よまつべ	一関市の小字・地名の由来は、近くを流れる砂鉄川にサケが遡上してきた事に由来し、「魚（うお）が転じた方言の「よ」が使われたのが由来・
82	束稲	たばしね	一関市の小字・地名の由来は不明。
83	越戸内	おっとうち	陸前高田市の小字・地名の由来は不明。
84	大嶋部	おおしまっぺ	陸前高田市の小字・地名の由来は不明。
85	生出	おいで	陸前高田市・由来は岩手山の伏流水が湧き出る場所に由来するが、この地域の水は豊富で、生命の源が沸き上がる場所として「生出」と名付けられた。
86	唯出	ただいで	陸前高田市の小字・地名の由来は不明。
87	鶺鴒住居町	うのすまいちょう	釜石市・アイヌ語で、鶺鴒が多く生息していた所に由来する。
88	女遊部	おなつべ	釜石市・由来は、アイヌ語の「オ・サツ・ペ」（川口の・乾く・川）に由来する。
89	花露辺	けろべ	釜石市の小字・三陸リアス式海岸の唐丹湾北部に位置する漁村

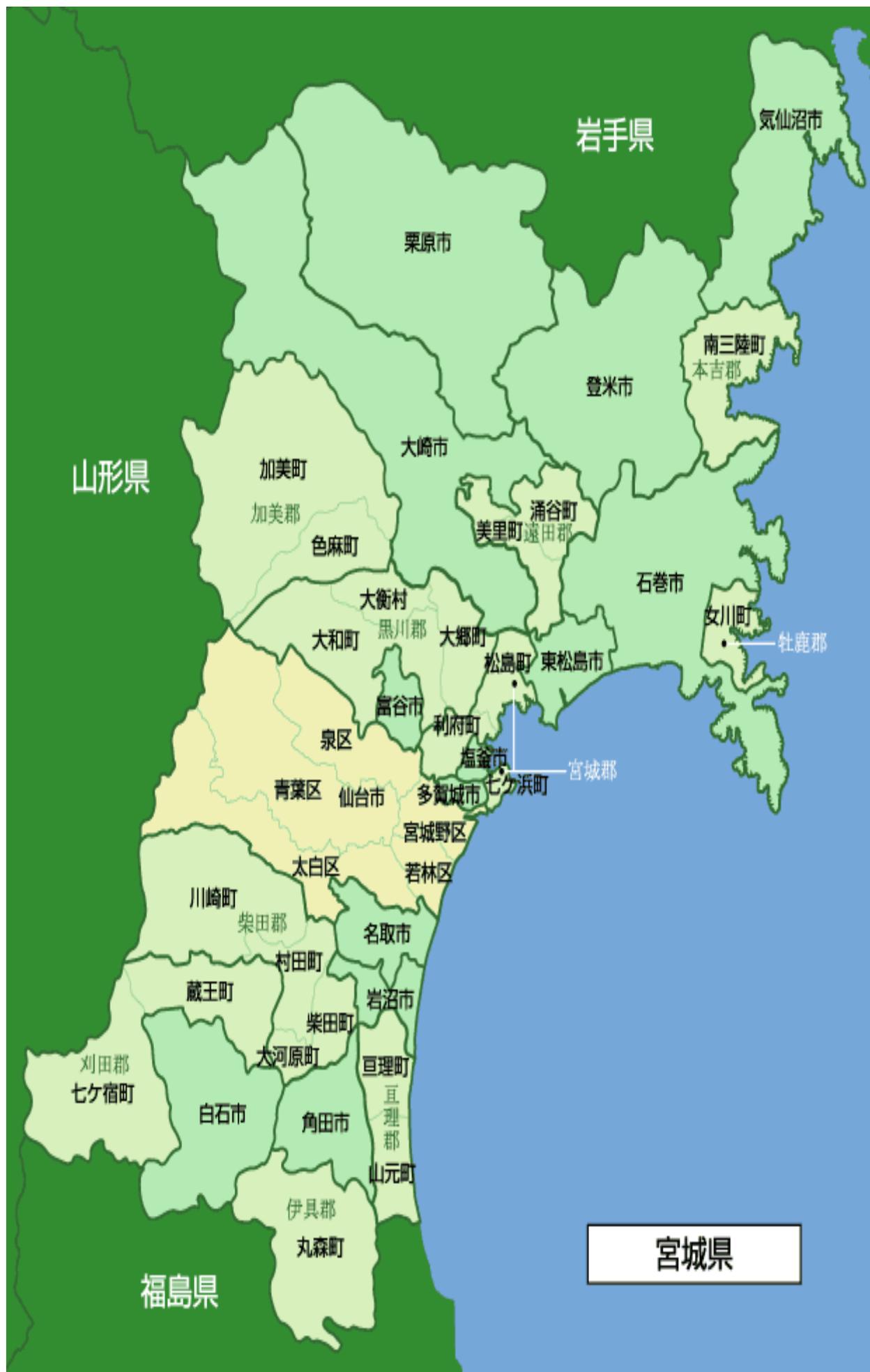
			ですが、由来については不明。
90	能舟木	よいなぎ	釜石市・由来は、古代の船にまつわる伝説に関係していると思われる・能は、古代の言葉で「良く進む」や能力が高いを意味し。舟木は「船を作るための木材」を意味する。
91	江牛	えろす	二戸市・アイヌ語に由来し、かつては「えろうし」とも呼ばれた。
92	狼穴	おいのあな	二戸市の小字・由来は、かつてはニホンオオカミが生息していた事に由来。
93	嘔ノ坂	おうのさか	二戸市の小字・地名の由来は不明。
94	李ヶ平	しもがたいら	二戸市の小字・地名の由来は不明。
95	高曲原	たかまぎはら	二戸市の小字・地名の由来は不明。
96	鰐内	つばない	二戸市の小字・北上川流域の河岸段丘の「ツバ（崖）が転じて付いたという由来がある。
97	爾薩体村	にさったいむら	二戸市・由来は、平安時代初期の村名「仁左平（にさたい）に由来する。
98	大更	おおさら	八幡平市・アイヌ語で、泥質の低湿地や大きな湿地帯を意味する事に由来する。この地域は、松川と赤川が広がる田園地帯であり、江戸時代初期に新田開発された。
99	吠田	かますだ	八幡平市・由来は、「吠」が「鎌」を意味し、鎌のような地形の田に由来する説や、「カマス」が「曲がる」を意味し、曲がりくねった地形の田に由来する説もある。
100	胆沢	いさわ	奥州市・由来には複数あり、有力なのは8世紀後半に朝廷が「山海二道」の奥地と認識していた地域を指すものと、延暦21年（802年）に坂上田村麻呂が胆沢城を造営したことに由来する説がある。
101	宇津撥根	うつぐね	奥州市の小字の・由来は、戦国時代末期のこの地に帰農した宇津家の歴史に由来する。宇津家は宇都宮の殿様に仕えていたが宇都宮家の改易により現在の地に移り、半農半医で生計を立て、地域の人々の健康願い「金医救命丸」（現在の宇津救命丸）を創薬し、無償で施薬したのが始まりという。
102	大歩	おおあご	奥州市の小字の・由来は、大股で歩いたこと。
103	主計谷地	かじやち	奥州市の小字の・地名の由来は不明。
104	上狼ヶ志田	かみおえなしだ	奥州市の小字・由来は、人間とオオカミの接点があったことを示す「狼地名」の一つ。
105	前沢衣関	まえざわきぬとめ	奥州市・由来については不明。
106	水沢虚空蔵小路	みずさわこくぞうこうじ	奥州市・地名の由来は不明。
107	衣川十一ヶ銘	ころもがわじゅういっかんめい	奥州市・由来は、高檜能山五輪上の谷に天女が舞い降りて羽衣を乾かしていたという伝説に由来する。

108	登満羽毛	とまんぱけ	奥州市・由来は、アイム語の「トマ・パネ」に由来する。「トマ」は湿地と「パネ」は下の方という事で湿地の下流。
109	西風・北風	ならい	奥州市の小字・西風や北風など、語源は山の並びに沿って吹く冬の強風から着いたと思われる。
110	衣川西風山	ころもがわなれやま	奥州市・衣川の地名の由来は、高檜能山五輪上の谷に天女が舞い降り、天の羽衣を乾かしたという伝説に由来する。
111	人首町	ひとかべまち	奥州市の小字・由来は、坂上田村麻呂に討たれた蝦夷の少年領主「人首丸」に由来する。人首丸は、悪路王（アテルイ）の甥または弟の大武丸の子とされ、大森山に立てこもり朝廷軍に抵抗したが、最終的には討ち取られたという。
112	蒲道沢	ぶどうさわ	奥州市の小字・由来については不明。
113	竈堂	へっついどう	奥州市の小字・竈（へっつい）とは、かまどの事で、そこに御堂があった事に由来。
114	迎下嵐江	むかいおろせ	奥州市の小字・安永風土記（1776年）によると、下嵐江は渋民沢の金山の繁栄と共に、お札所や荷継問屋があり、大いに栄えた地域で、かつては金山で栄え仙北街道の要衝であった。
115	衣川葦ヶ沢	ころもがわよしがさわ	奥州市・衣川荘の領主であった葦名氏が、玄和4年（1618年）から51年の歳月をかけて開削した「葦名堰」に由来。
116	鵜飼大緩	うかいおおだるみ	滝沢市・地形による由来と思われる。
117	鵜飼鰻森	うかいかじかもり	滝沢市・由来は、魚のカジカと森が関連した地名。
118	鵜飼狐洞	うかいきつねぼら	滝沢市・由来には諸説あり、鵜飼宮内秀純という武士がこの地を治めていた事に由来や、南部公が鵜を飼っていた事に由来で、「狐洞」は小字で、狐の住む洞があった事に由来。
119	篠木芋桶沢	しのぎおぼけざわ	滝沢市・篠木という地名の由来は坂上田村麻呂が家来に「寒暑をしのぎ、鎮撫の任にあたれ」と命じた事に由来するという説があり、芋桶沢の由来は不明。
120	蓬立	よむぎだち	滝沢市・由来については不明。
121	鶯宿	おうしゆく	岩手郡・由来は、ウグイスが傷を癒したという伝説に由来。
122	皂	さいかち	岩手郡の小字・由来は、マメ科の落葉高木である「サイカチ」に由来する。この木は、木材として利用されるほか、豆果が洗剤、生薬として古くから利用された。
123	砂壁	しゃっかべ	岩手郡の小字・由来については不明。
124	鹿津田	そつだ	岩手郡・雫石町に所在する地名ですが、由来は不明。
125	漆真下	うるしまっか	岩手郡の小字・アイヌ語で「漆の木が多い集落」を意味する言葉が由来と言われる。
126	高家領	こうけろう	岩手郡の小字・江戸時代にはこの地名はあった。「高家」コウケをコロゲとも発音していた。由来は不明。
127	廻立	まったち	岩手郡の小字・由来については不明。

128	欠	がっけ	岩手郡・由来については不明。
129	蟹沢	がんじゃ	岩手郡・由来は、蟹（カニ）の住んでいた所に由来する。
130	栗田	くりのきだ	紫波郡の小字・由来については不明。
131	禰宣地	ねげち	紫波郡・由来は、神道の「禰宜（ねぎ）」という役職が住んでいた地に由来する可能性が高いと思われる。
132	甘木	はたふく	紫波郡の小字・由来については不明。
133	五百津	いおつ	胆沢郡の小字・五百というのは「多い」という意味を表し、「津」は港を指すので、港の多い地に由来すると思われる。
134	九石	さざらいし	胆沢郡の小字・由来は、村にある「駒爪石」が由来するとされているが、定かでない。
135	橈曳沢	そりひきざわ	胆沢郡の小字・由来は、「そり」が道具として使われていた事に由来する。「そり」という言葉は、焼き畑や切り替え畑、山地や急傾斜地を指す場合があり、当て字で「橈」「曾利」「反り」などが使われる場合がある。
136	覆盆子	いちご	西磐井郡の小字・由来は、木いちごの果実の形が伏せた盆に似ている所から「覆盆子（いちご）」の名づけになったという。
137	窟	いわや	西磐井郡の小字・由来は、主に「達谷窟（たっこくのいわや）」に代表されるような「岩をくり抜いた場所や洞窟」を指し、信仰の対象や、かつては蝦夷（えみし）などの住居とされていた歴史的背景に由来する。
138	鬘石	かつらいし	西磐井郡の小字・由来は、昔この地を支配していた悪路王にさらわれた娘が逃げ出し捕らえられ、見せしめのため首を切り落として太田川に流した。その首が下流の大きな岩に流れ着き、髪の毛がその岩に絡みつきカツラのように見えた事から「鬘石（かつらいし）」と呼ばれた。
139	竹汀	たかぎわ	西磐井郡の小字・由来については不明。
140	畝畑	うねはた	気仙郡の小字・由来については不明。
141	大通	だいのかよう	気仙郡の小字・江戸時代に旧盛岡城主南部家が所有していた「御菜園」と呼ばれる菜園が広がっていた地域を、大正時代末頃から市街地として整備した事に由来する。
142	二度成木	ふたなぎ	気仙郡の小字・由来は、南部藩との藩外番所の（二度成木）から付いた地名。
143	上京	かみよし	上閉伊郡・由来については不明。
144	吉里吉里	きりきり	上閉伊郡・由来は、砂浜を歩くと「キリキリ」と音が鳴る「鳴き砂」に由来する説と、アイヌ語で「白い砂浜」を意味する説がある。古くは「吉利吉利」や「吉里々々」とも表記した。
145	蕨打直	わらびうちな	上閉伊郡・由来については不明ですが、植物の「ワラビ」に関係があるかもしれません。」
146	雷峠	いかとうげ	下閉伊郡の小字・由来は、カミナリがよく鳴り響く場所である事に由来。

147	白土	しらんど	下閉伊郡の小字・由来については不明。
148	氷渡	すがわたり	下閉伊郡の小字・由来は、冬に川が凍って渡れる場所から付いた地名。
149	礫	つぶて	下閉伊郡の小字・由来については不明。
150	櫃取	ひとり	下閉伊郡・由来は「櫃取山」や「櫃取湿原」などに由来か。
151	袈野	ほろの	下閉伊郡・由来は、アイヌ語の「ポロ（大きな）」に由来する。
152	鑪	やすり	下閉伊郡の小字・由来については不明。
153	野向	やんごう	下閉伊郡の小字・由来については不明。
154	寄部	よっぺ	下閉伊郡・由来については不明。
155	狄塚	えづか	九戸郡・由来は、折爪岳の東麓、瀬戸内川の両岸に位置する地域を指す事が由来。
156	百目金	どうめき	九戸郡・由来については不明。
157	級久保	まだくぼ	九戸郡・由来については不明。
158	悪津	あくそ	九戸郡・悪津とは「山谷河岸小平地。おくつの転訛で、川に沿った低地」を意味する。
159	小子内	おこない	九戸郡・由来は、アイヌ語で「オコナイ」に由来し、「川下」や「川尻」を意味する。
160	宿戸	しゅくのへ	九戸郡・由来は、街道の宿駅を中心に集落が形成された事に由来する説と、アイヌ語の「シュクヌプ（大きな獲物が居る所）」が語源という説がある。
161	泥濘	ぬかり	九戸郡・由来は、「ぬかるみ」に由来する。
162	戸類家	へるけ	九戸郡・由来については不明。
163	傘木	からかさぎ	二戸郡・由来については不明。
164	小鳥谷	こずや	二戸郡・由来には諸説あり、鳥を捕らえる小屋があった場所を意味する「コトヤ（小鳥屋）」に由来する説と、アイヌ語の「コズヤ」が「河岸の石地の湿地」を意味する説がある。
165	過利石	とがりいし	二戸郡・由来については不明。
166	野磯鶏	のそけ	二戸郡の小字・由来については不明。
167	平糠	ひらぬか	二戸郡・由来については不明。
168	女鹿	めが	二戸郡・女鹿は馬淵川の支流の女鹿川に沿って開けた地域であり、男鹿に対抗する地名と思われる。
169	辺廻	へぐり	二戸郡・由来については不明。
170	出ル町	いずるまち	二戸郡・由来は不明ですが、天和2年（1682年）の惣御代官所中高村付に村名が記載されており、古くから集落が形成されていた。

宮城県



NO	地名	読み方	由来
1	愛子	あやし	仙台市・由来は、古くからこの地に祀られている「子愛（こあやし）観音」に由来し、この観音様は子安観音とも呼ばれ、安産や子どもの愛育を守護するとも言われている。
2	霊屋下	おたまやした	仙台市・由来は、伊達政宗公の霊廟である「瑞鳳殿（ずいほうでん）」に由来する。「御霊屋（おたまや）」から「御」の字が省かれ「霊屋下」となった。
3	上杉	かみすぎ	仙台市・由来は、かつて存在した「上杉山通り（かみすぎやまどおり）」を短縮したもので、「上」は仙台城に近い側を意味する。子の通りは、仙台藩4代藩主の伊達綱村が杉の栽培を奨励し、台原段丘を杉の栽培地とした事に由来する。
4	掃部丁	かもんちょう	仙台市・由来は、江戸時代にこの地に広い屋敷を構えていた「上遠野掃部（かどのかもん）」という人物に由来する。
5	外記丁	げきちょう	仙台市・由来は、伊達政宗の時代に活躍した武将「斎藤外記永門（さいとうげきながかど）」の屋敷があった事に由来する。彼の功績を称え、住んでいた場所にその名を残す事が許されたと伝えられる。
6	定義↑	じょうぎ	仙台市・この地名は、平重盛の家臣であった平貞能（たいらのさだよし）が、平家滅亡後にこの地に隠れ住み、自らの名を「定義」と改めた事に由来する。
7	新伝馬町	しんてんまちょう	仙台市・元は「日形町」と呼ばれており、延宝年間（1678年～1680年）頃に「新伝馬町」と呼ばれるようになったのは、伝馬役を担う新な町となった事に由来する。
8	西風側	ならいがわ	仙台市・由来は「西風（ならい）」という地名は、冬の強い風を吹く地域を意味する
9	旅籠町	はたごまち	仙台市・かつて遊郭があった地域が、売春防止法廃止後に旅館街へと転用され、多くの旅館が集まった事に由来する。
10	神子町	みこまち	仙台市・由来は、かつて「朝日」という名の神子（巫女）が住んでいた事に由来。この「神子」は、町割りがされる以前に桜田川と梅田川を開き、耕作に貢献したと伝えられる。
11	實沢	さねざわ	仙台市・由来は、中世には「山村」と呼ばれた「郷村」の一部であり、南北朝時代には南朝方の拠点であった「山村」に由来する。その地域の一部の「実沢」は天正19年（1591年）の検地帳には「さねざわ」と地名が見られる。
12	将監	しょうげん	仙台市・由来は、伊達政宗に仕えた仙台藩士「横澤将監吉久」に由来する。将監は元禄年間（1688年～1703年）に、将監沼を含む七北田川流域の灌漑工事に尽力した土木技術者。
13	糺	ただし	仙台市・由来は、「糺す」という言葉に由来する。 「糺す」の意味は「縄をより合わせる」という意味。
14	朴澤	ほうさわ	仙台市・由来は、泉区朴沢に所領を持つ大河戸氏の一族の朴沢

			氏に由来する。
15	小児	こだま	仙台市・由来については不明。
16	榴岡	つつじがおか	仙台市・由来は、かつてこの一帯がつつじに覆われていた事に由来。元々は「躑躅岡」た「山榴岡」と表記していたが、画数が多いので「山」が略され「榴岡」という表記が広まった。
17	控木通	ごうらきどおり	仙台市・由来は、かつてはこの地にあった幹が空洞になった大木に由来する。この空洞を指す仙台の方言で「ガホラ」が「ごおら」となり、「ごおらの木」と呼ばれた事が由来。
18	堰場	どうば	仙台市・由来は、広瀬川と七郷堰と六郷堰の取水口に挟まれた場所に由来する。
19	日辺	にっぺ	仙台市・由来は、アイヌ語で「川が合わさる」という意味で、広瀬川と名取川の合流地点。
20	秋保	あきう	仙台市・由来は複数あり、主なものは平安時代にこの地を治めていた「藤原秋保」という人物にちなむ説や「百寿ノ秋ヲ保ツ」という長寿を意味する言葉に由来する説、秋の景色が特に優れている事から付いたという説がある。
21	大縦	おおもみ	仙台市・由来については不明。
22	本砂金	もといさご	仙台市・由来は、かつてこの地を治めていた砂金氏に由来する。本砂金という地名は、15世紀前半に砂金村の守護人であった砂金常清が築城したことが始まりで、その後に本城を別の場所に移したので、元の場所を「本砂金」と呼ぶようになった
23	生出橋	おいでばし	仙台市・生出についての由来は不明・
24	大罫町	おおとやまち	仙台市・由来は、「罫（とや）」という鳥のねぐらを意味する古語に由来する。太白山の裾野に広がる丘陵地で、かつては鳥が群れ眠る自然環境がその名の由来。
25	鉤取	かぎとり	仙台市・由来は、「鉤取寺」という寺院に由来する。鉤取寺は、承和2年（835年）に天台宗の西翁和尚によって太白山麓に開山された。その後、寛永13年（1636年）に輪王寺の角外麟如和尚により曹洞宗の寺院として改宗、再建された。
26	茂庭	もにわ	仙台市・由来は、藤原北家秀郷流河村氏の一族が、欧州合戦での功績により源頼朝から与えられた名取郡の所領に居館を設けた。その後に茂庭氏子孫が根拠地としたことに由来、またはアイヌ語の「モイワ」（小さい山）が由来する。
27	牛生町	ぎゅうちょう	塩釜市・由来については不明。
28	庚塚	かのえづか	塩釜市・由来については不明。
29	崩土地	もえどち	気仙沼市・由来は、崩れた土地と思われる。
30	鮪立	しびたち	気仙沼市・由来は、かつてマグロの遠洋漁業が盛んで、「沖からマグロが立ってやってくるようだ」と例えられた事に由来。
31	載鉤	のせがき	気仙沼市・由来については不明。
32	五駄鱈	ごんだら	気仙沼市・由来は、巨大な鱈の化身と娘の悲恋にまつわる民間

			伝承。この伝承では、娘のもとに通っていた若者の正体が巨大な鱈であり、この鱈が五駄（馬5頭分の荷物）もの重さであった事から「五駄鱈」と呼ばれるようになった。
33	色麻	しかま	加美郡・由来は、天平年間（729年～749年）に播磨国の飾磨（しかま）から移住した兵士が「しかま」を「色麻」と記した事に由来する。
34	越河	こすごう	白石市・由来には諸説あり、斎川の越王堂（古将堂）に至る道が転訛したという説と、元の名が「小菅生」（こすがい）で、菅が生い茂った土地であったという説、文治の役で藤原泰衡が掘った濠を鎌倉方が渡って進軍した事から「越河」となった説、「ごう」は「音のする川」を意味し、川を渡河する地点に開けた集落を指すという説などがある。
35	不澄ヶ池	すまづがいけ	白石市・由来は、源義経が奥州平泉に下向の時に、この地で一休みした際に、武蔵坊弁慶がこの池の水で薙刀を研ぎ、その時のさび水が池に流れ込み、それ以来濁ったままになり、村人がこの池を「不澄ヶ池」と呼ぶようになった事に由来。
36	鹿又	かのまた	石巻市・古くは「河俣村」と呼ばれていた。これは、江合川と北上川の合流点南側、追波川と北上川の分岐点という地理的特徴に由来する。1745年に伊達政宗の家臣の瀬上影敦の家紋が「鹿の角又」であった事から「鹿又村」に改められた。
37	長渡	ふたわたし	石巻市・由来は、水際の平らな場所を意味する。
38	渡波	わたのは	石巻市・由来は、万石浦の入江口で、波が折り渡して居た為に砂丘が生じ、それが陸地化していった土地で、初めは「波折渡之渚村」と称していた事から「渡波」と名付けられた。
39	棟沢	さいかつさわ	名取市・由来は不明ですが、地形に由来すると思われる。
40	冷畑	みずはた	名取市・由来については不明。
41	愛島	めでしま	名取市・由来は、明治時代に笹島、北目、小豆島、塩手の4村が合併した際、それぞれの村名から「メ・デ・シマ」を取り「目出島」と名付けられたが、のちに「愛島」の漢字が当てられた。
42	閑上	ゆりあげ	名取市・諸説ありますが、最も有力なのが江戸時代に仙台藩主の伊達綱村が「門の中に水が見える」として「閑上」と名付けたという説と、その昔、観音像が浜に閑上られた事に由来する説がある。
43	鯛台	とどだい	登米市・由来については不明。
44	迫	はざま	登米市・かつては沼地が多く水害に悩まされていたが、江戸初期に仙台藩によって大規模な水田開拓工事が行われた。長沼や伊豆沼は遊水地として整備され、コメの一大生産地となった。
45	左足	こえだて	栗原市・由来については不明。
46	惣滑沢	ぬかりさわ	栗原市・この地名の由来は、地形から付いたもので、「惣」はす

			べてや全体を意味し、「滑」は地形の傾斜が緩やかさを示しています。まとめると全体的に緩やかな地形の土地という意味。
47	東名	とうな	東松島市・由来は、奈良時代から平安時代にかけて使われた「東海道」という言葉に由来する。東名という地域は、文字通り「東方の海沿いの道」を意味します。
48	野蒜	のびる	東松山市・由来は、野生の「蒜（ヒル）」が多く自生していた事に由来。
49	桃生	ものう	東松山市・石巻市・由来は、アイヌ語で「モムヌプタ（流域の丘）の意味があるという。1955年に中津山村と桃生村が合併し、桃生町となった。「続日本紀」には、天平宝字元年（757年）に「陸奥国桃生」が、宝亀2年（771年）に陸奥国桃生郡」の記述がある。
50	荒脛巾	あらはばき	大崎市・由来は、足の神・境界の神として信仰される「荒脛巾神（あらはばきのかみ）」に由来する。この神は、古代先住民（荒吐族や荒脛巾族）の祖神や守護神として祀られていた。
51	李埵	すもぞね	大崎市・由来は、かつて村の境に「スモモ」の大きな木があった事に由来する。
52	金五輪	かなごりん	大崎市・由来については不明。
53	百々	どうどういち	大崎市・由来は、百々氏が居城としていた百々城に由来する。百々城は別名「鶴城」とも呼ばれ、城の配置が鶴の形に似ていた事や、築城時に鶴を埋めて鎮護の神とした伝承がある。
54	榆木	たまのき	大崎市・「安永風土記」によれば、かつて村に榆（にれ）の木の大きな木があったので村名としたと記されている。
55	鬼首	おにこうべ	大崎市・由来には諸説あり、有力なものは平安時代に坂上田村麻呂が蝦夷を討伐した際に、討ち取った蝦夷の首領の大武丸を斬首した際に首がこの地に飛んできたという伝説や、元々は「鬼切部」と呼ばれていたものが転訛したものという説。
56	川渡	かわたび	大崎市・由来は、荒雄川（江合川）を挟んで対岸の鍛冶谷沢宿と川渡して結ばれていた事に由来する。古くから「脚気川渡」として知られて、湯治客を集めて来た歴史ある温泉地。
57	遠刈田	とおがった	刈田郡・由来には諸説あり、古くは「湯刈田（とうがった）」と呼ばれており、平安時代末期に金売橘次が霊泉を発見したという説と、大ガニと大うなぎの争いで、大うなぎの尾が流れ着いた場所に温泉が湧いたという民話がある。
58	七ヶ宿	しちかしゆく	刈田郡・由来は、江戸時代に奥州街道と羽州街道を結ぶ「山中七ヶ宿街道」に上戸沢・下戸沢・渡瀬・関・滑津・峠田・湯原の七つの宿場が置かれていた事にちなむ。
59	天炉	あまほど	伊具郡・由来については不明。
60	覆盆子原	いちがはら	伊具郡・由来は、平安時代に「イチゴ」と呼ばれていた植物に由来するとされている。

61	四重麦四	よえむぎよん	伊具郡・由来については不明。
62	由縄坂	よなさか	伊具郡・由来については不明。
63	西歩沢	さいかちざわ	柴田郡・由来については不明。
64	槻木	つきのき	柴田郡・由来は、かつてこの地域に槻（ケヤキの古木）の木が自生していた事に由来する。特に、落雷で枯れた2本の槻の木を惜しんだ里人が、新たに槻の木を植えた事が地名の由来
65	菅生	すごう	柴田郡・由来は、「菅生（すげ）」という植物が多く自生していた事に由来する自然地名と考えられる。「菅」は、菅笠や蓑（みの）の材料として生活に欠かせない植物。
66	峩々	がが	柴田郡・由来は、切り立った岩肌の景観に由来する。
67	逢隈	おおくま	亶理郡・由来は、阿武隈川と関連が深く「阿武隈川と逢う場所」や、川の古名である「逢隈川（あふくまがわ）」に由来する
68	百々	とど	亶理郡・由来は、水流の音に関係した地名で、かつて急峻な流れの川があった事から、その水流の音の表す「どうどう」が転じて名付けられた。
69	亦楽	えきらく	宮城郡・地名の由来は不明。
70	菖蒲田浜招又	しょうぶた はままねぎまた	宮城郡・由来は、「菖蒲田浜」と「招又」の二つの地名が組み合わせた地名。「菖蒲田浜」、昔この地にアヤメが咲き乱れていた事から「あやめヶ浦」と呼ばれ、それが転じて「菖蒲田」と表記されるようになったという俗説があり、「招又」については何らかの紋所や地形もしくは人名に由来する可能性がある。
71	魚板	まないた	黒川郡・由来については不明。
72	不来内	こずない	黒川郡・由来は、アイヌ語の「ナイ（沢）」に由来する可能性が考えられるが確証はない。
73	彫堂	えりどう	遠田郡・由来については不明。
74	小牛田	こごた	遠田郡・由来には諸説あり、「小田郷」と「牛甘（うしかい）郷」が統合された際の合成地名であるというのが有力説ですが、また、奈良時代の「小田郡」の一部を指す「小小田（こごた）」が転訛したという説もある。
75	中埜卯時前一	なかぞねぼうじ まえいち	遠田郡・由来は、「中埜（なかぞね）」は川の氾濫によって出来た自然堤防の痩せ地を意味すると考えられ、「卯時前一」については由来は不明。
6	中樽	なかま	遠田郡・由来については推測ですが、樽のような地形の中央と思われる。
77	東風浜	こつはま	牡鹿郡・由来は不明ですが、「東風（こち）」は東から吹く風を指し、特に春先に吹く東風は「春一番」として知られている
78	八沢川	やさがわ	仙台市・由来については不明ですが、「八沢（やさわ）」という地名は「谷沢」の重複語であるか、「八つの沢が流れる字地」を意味するものと思われる。

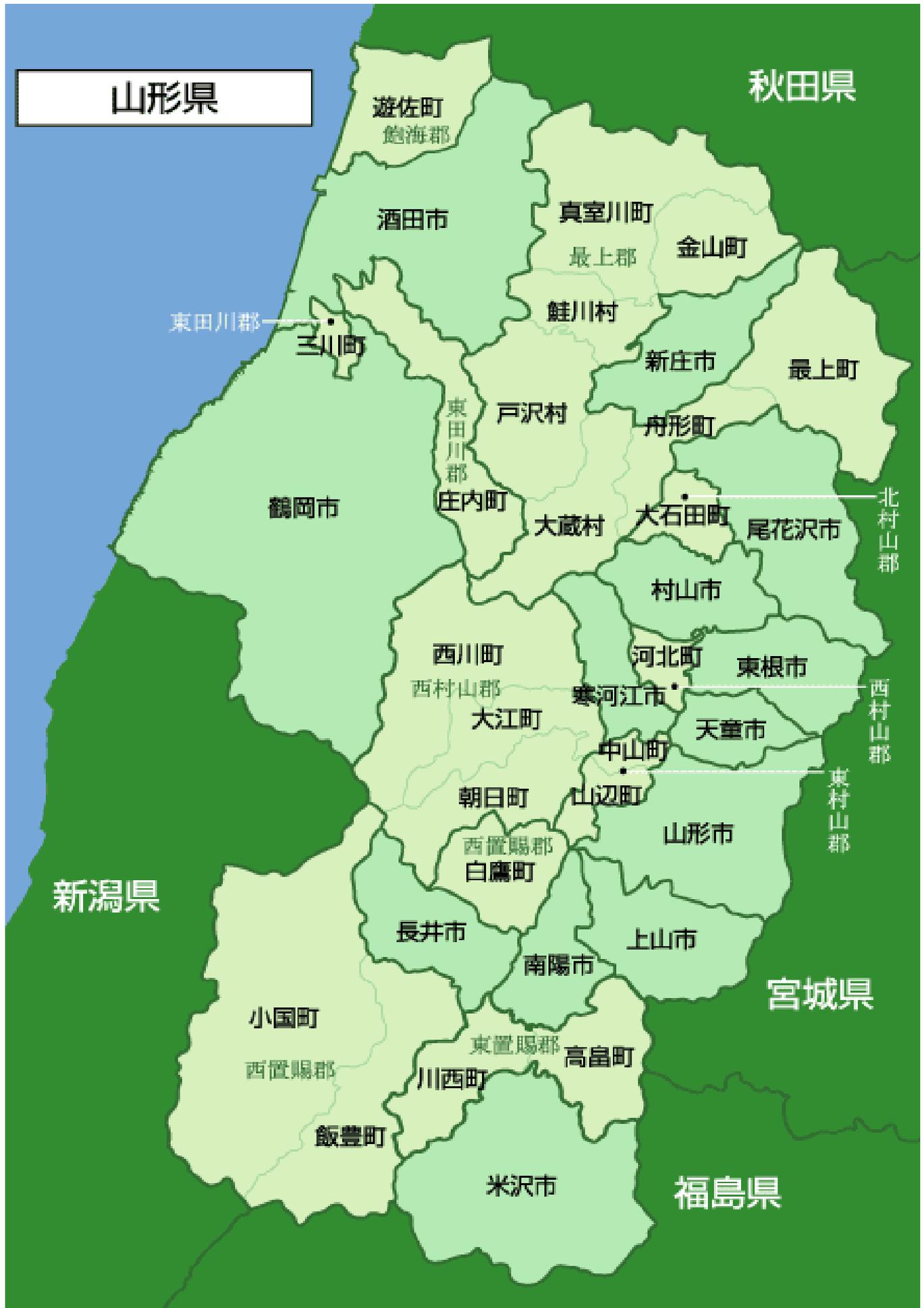


NO	地名	読み方	由来
1	西風沢	あっちざわ	秋田市・由来については不明ですが、地形から西風が強く吹く沢のある地域とも思われる。
2	鳩坂	うとさか	秋田市・由来は不明ですが、「鳩」は鳥が早く飛ぶという意味で、情景から鳥が素早く飛び交う坂を意味するか。
3	鴟谷地	しととやち	秋田市・由来は、鴟（しとど）が生息する谷地（湿地）に由来する。シトドは、ホウジロ科の小鳥で、昔から日本に生息。
4	鳩崎	におざき	秋田市・由来は、「鳩（にお）」という鳥が生息する水辺の地形に由来する。「ニオ」は、カイツブリの古名であり、水辺に生息する鳥で、この地域が沼地である事から、「ニオ」が多く生息をしていた。
5	八橋	やばせ	秋田市・由来には諸説あり、かつて地域に八つの橋があったという説と、坂上田村麻呂が射た矢が走り落ちた場所である事から「矢走」と呼ばれたという説。
6	八橋鯨沼	やばせじょうぬま	秋田市・由来は、この地域が「泉字鯨沼（いずみどじょうぬま）」と呼ばれていた。「鯨沼」については、かつては沼地で、「ドジョウ」が生息していた事に由来する。
7	湊滞溜	ゆかる	秋田市・由来は、「湊」は水が混じる、「滞」は水が流れる、「溜」は水がたまる事を表し、かつてこの地域は水辺や湿地であった可能性が高く、地形や自然環境を象徴した地名。
8	万町	あらまち	能代市・由来は、宝永元年（1704年）の地震をきっかけにそれまでの「荒町」という名称が「聞よからじ（きこえがよくない）」として「熊谷茶右衛門という人物によって「万町」と改名された。
9	磐	いわお	能代市・由来については不明。
10	太田面	おおたもて	能代市・由来については、「太田」は古代に開拓された広大な耕作地、特に新しく作られた水田を意味する。「面」は不明。
11	鰯淵	かいらげふち	能代市・由来は、延宝7年（1679年）に田尻村から分村した際に名付けられた。それ以前は扇田村の支郷である田尻村でした。「鰯（かいらげ）」とは、貝の種類を指す古い言葉で、「カラスガイやドブガイ」と言った淡水生の二枚貝を意味する。その貝が多く自生する淵が由来。
12	川反町	かわばたまち	能代市・由来は、米代川のほとりに位置する子が由来。「かわばた」という地名は通常「川端」と書きますが、藩政時代には「川端」と書いていたが、町人の街となり、武士から見て川の反対側に位置するようになった為「川反」の字が宛てられたという説がある。
13	槐	さいかち	能代市・由来は、「サイカチの木」（厄除けの木）が語源という
14	塩干田	しおからだ	能代市・由来は、地内に塩の出る池があった事に由来する。「塩（シオ）」が砂鉄や廃砂、「カラ」が干しあがる・堆積す

			る、「ダ」が場所を示しているという説がある。
15	芝童森	しどうもり	能代市・由来についてははっきりした文献は残ってはいませんが、地域の自然や歴史に関するものと思われる。「芝」は草が生い茂る場所で、「童」は「童子信仰」のまつわる伝説で「森」のどの場所から付いた地名と推測できます。
16	竹生	たこう	能代市・地名の由来は不明。
17	鳥矢場	とやば	能代市・由来は、鳥を捕獲する場所。
18	滑良子川端	なめらこかわばた	能代市・由来については不明。
19	荷八田	にはた	能代市・由来については不明。
	機織轆ノ目	はたおりそりのめ	能代市・由来は、この地は昔、機織り村という地名でした。「轆ノ目」の由来は轆（そり）を使う地域で使われた地名。
21	腹鞆ノ沢	はらがいのさわ	能代市・由来は、地元の地形や昔の出来事に由来する。「腹鞆」は馬具や腹巻を指すもので、馬の放牧地であったり、馬を使った交通が盛んであった事を示している。
22	吹越	ふっこし	能代市・由来は、風が吹きこしていく場所を指す地名。
23	古川布	ふるかわきし	能代市・地名の由来については不明。
24	朴瀬	ほのきせ	能代市・この地名は、天正19年（1591年）の文献に「ほうの木瀬村」と記されている。朴の木は神聖な木として崇められ、その根元から清らかな水が湧き出していた事に由来する。
25	松長布	まつながせき まつながぬの	能代市・由来については定かではないが、その地が自然環境に津難でつけられたとも思われる。「松」はその地に松の木が多くあり、「長」は川や道が長く伸びている地形「布」は地域によっては水辺や湿地を表す言葉として用いられる。
26	新処	あらところ	横手市・新処村は、1590年代に由利十二頭の一つの仁賀保氏によって開かれた。かつては由利郡の本城があったため、地名に「元」を冠する場所が多くみられる。現在は矢島町の一部となっている。
27	傾城塚	けいせいづか	横手市・由来は、京から連れてこられた傾城（遊女）が生き埋めされたという伝説に由来する。
28	狙半内	さるはんない	横手市・由来は、アイヌ語の「サルハンナイ（サルパナイ）」に由来し、「沢の上流にある葦原」という意味。
29	剰水	せせなぎ	横手市・由来は、かつてこの地を開拓した人が、家々の生活排水を運び良田を成した事から「剰水（せせなぎ）」と呼ばれるようになったという言い伝えがある。
30	樋脇	とよわき	横手市・由来は不明ですが、鹿児島県の薩摩川内市に同名の地名がありその由来は、江戸時代初期に存在した「樋脇城」にちなんで付けられた「樋脇郷」に由来する。
31	乗阿気	のりあげ	横手市・由来は、かつてこの地域が「阿木村（あげむら）」と呼ばれていた事に由来する。「阿木村」の地名については、前九年の役の際に源義家が軍勢を引き上げて陣取った事から「挙げ

			(アゲ)の里」と称される伝説がある。
32	婦気大堤	ふけおおづつみ	横手市・由来は、「婦気(フケ)と「大堤」という二つの村が合併した事に由来する。「フケ」は田窪沼などの低湿地帯を意味し、「大堤」は大沼がある事から名づけられた地名。
33	大葛	おおくぞ	大館市・由来は、古くは金山として栄え、大規模な鉱山があった事に由来する。大葛金山で採掘された金は、奈良の大仏や金閣寺にも使われたと伝えられる。
34	四羽出	しのはい	大館市・由来については不明。
35	馬喰町	ばくろうちょう	大館市・由来は、かつて馬市が開かれ、馬喰(馬を売買する商人)の為の宿や飲食店が多く存在した事に由来する。延宝3年(1675年)の大火後、商人がこの地に住むようになった
36	部垂町	へたれまち	大館市・由来は、佐竹氏の家臣であった部垂義元の家臣団がこの地に住んだ事に由来する。彼らは「部垂衆」と呼ばれ、主君の部義元を祀る「部垂八幡神社」を建立した。
37	八幡沢岱	はちまんさわたい	大館市・地名から推測される由来は、八幡神社の近くで山間部にある水の流れや谷間のある平らで広い土地を指したものの。
38	鏡田	あぶみでん	湯沢市・由来については不明ですが、鏡田は縄文時代晩期の遺跡が発見された場所があり、古くから人々が生活していた地域
39	御囲地町	おかちまち	湯沢市・由来は、江戸時代に大堰の終点に藩の材木場が設置された事に由来する。「御囲地」は木材を囲い貯蔵する場所を意味する。
40	箴の目	おさのめ	湯沢市・由来は、織物を作る際に糸を蜜に並べ、間隔を均一にする道具で、その形状はクシの歯のように細長い板が平行に並んでいるのが特徴で、櫛状になった地形から付いた地名。
41	頭首沢	こうべさわ	湯沢市・地名の由来については不明。
42	辻ヶ沢	にがいがさわ	湯沢市・由来は、昔、この地には若い姫と家臣たちが住んでいて、ある戦いに敗れ、敵から逃れるためにこの沢までたどり着いたが、ついに敵に見つかってしまい、敵に抵抗おなしく全員が命を落とした。この地が後に「辻ヶ沢」という地名が付いた
43	内越	うてつ	由利本荘市・由来は、主に由利郡北部にあった近世の行政単位「内越通」(うてつどおり)に由来する。「内越通」は、元和9年(1623年)に岩城吉隆が由利郡北部に領地を与えられ、亀田藩が成立した際に、領内を再編成して設けられた四つの行政単位の一つ。芋川下流の平坦な村々と海岸沿いの村々から構成されていた。
44	大凹	おおひど	由利本荘市・由来は、「凹」という漢字が地形の窪みや谷間を表す事に由来。
45	木在	きさら	由利本荘市・由来は、2005年に合併して誕生した。「由利」は「由利の花」に由来する説や、日本海の砂丘地を指す「ユラ」(風波で砂がゆすり上げられた土地)に由来するという説が

			ある。「本荘」は、寄進された荘園に由来する。
46	下地ヶ沢	げじがさわ	由利本荘市・由来は、集落を流れる川の下流にある沢の近くの地域を意味すると思われる。
47	笹子	じねご	由利本荘市・由来は、かつてこの地域に笹原が広がっていたことから「笹の実」の古い呼び方である「自然粳（じねんご）」（笹の実）に由来する。
48	雪車町	そりまち	由利本荘市・由来は、かつて馬そりが行きかい、この場所で休憩していた事に由来する。また、「そり」という言葉は「焼き畑」を意味するという説もある。
49	二十六木	とどろき	由利本荘市・由来には諸説あり、川の水音「とうとう」に「十」と「十」を合わせて「二十」、そして「ろき」に「六木」を当てて「廿六木」（とどろき）と読ませたという「水音由来説」と、水が落下する響きや瀧の音の擬音「トドロキ」からきてる「擬音語説」がある。
50	直根	ひたね	由利本荘市・由来は、この地域が元々、真っすぐな根っこを持つ植物がたくさん生えていたからという説と、真っすぐな道が続いていた事に由来する説がある。
51	及位	のぞき	由利本荘市・由来には諸説あり、主な説としては、修験者が崖から宙づりになって修行した「覗き」に由来し、のちに高い位に及んだことから「及位」の字が当てられたという大蛇伝説に関連する説と、または木を切り開いて開拓した土地を意味する「ノゾキ（除木）」に由来する説がある。
52	葎沢	むぐらさわ	由利本荘市・由来は、この土地がかつては「ムグラ」という植物で覆われていた沢だった事に由来する。「ムグラ」とは、一般的に「やぶからし」や「カナムグラ」というツル系の植物。
53	笑内	おかしない	北秋田市・由来は、アイヌ語の「オ・カシ・ナイ」（川尻に仮小屋がある川）に由来する。
54	象潟	きさがた	にかほ市・由来には諸説あり、主なものは「刻まれた潟」を意味する「刻潟」、「きさ貝」が多く獲れた事に由来する「象潟」象の古称「きさ」から象の形をした潟という説もある。
55	金浦	このうら	にかほ市・由来には「諸説あり、古くは「木ノ浦」と呼ばれていた説（出羽国風土記）が有力で、「金ノ浦説」では、応仁元年（1467年）に信州から海路で下向した小笠原大和守重添が、無名の磯部に着船した際に「金ノ浦」と名付けたという説がある。（塩越村金氏系図由緒記略）
56	西馬音内	にしもない	雄勝郡・由来は、アイヌ語で「ナイ」が川を意味する。「馬音」は「モム」の当て字ではないかという説。

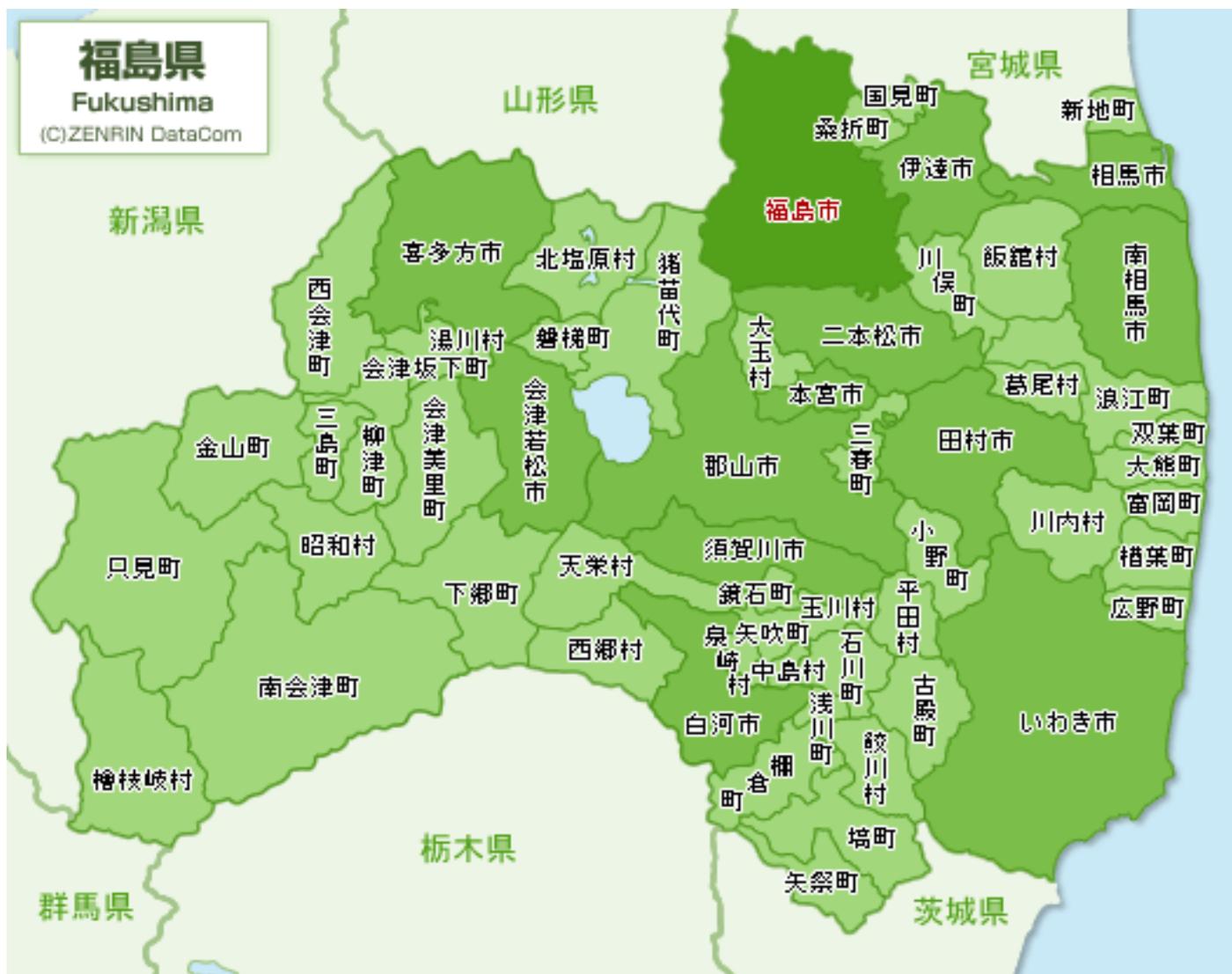


NO	地名	読み方	由来
1	七日町	なぬかまち	山形市・由来は、最上義光が城下町を整備した際、産業振興のために「7」のつく日に市場を開設した事に由来する。
2	旅籠町	はたごまち	山形市・由来は、最上義光が築いた城下町に旅籠屋（はたごや）が多く集まっていた事に由来する。
3	温海	あつみ	鶴岡市・由来は、川に湧き出る温泉の湯が海に流れ込み、その海を温めた事に由来する。温海温泉は、弘法大師が杖を突きたてた場所から湯が湧き出たのが始まりという伝説がある。
4	五十川	いらがわ	鶴岡市・由来は「多くの川が流れる込む場所」や「イヌカラムシ（イラ）が自生する川」に由来する。「五十」という漢字が「数の多い事」を意味し、多くの支流が集まって流れる川であることから名づけられたという説もある。
5	遠賀原	おがわら	鶴岡市・由来は、遠賀神社と藤原の原という地名に由来する。
6	押口	おせぐち	鶴岡市・由来は、地形に由来し、山道が迫り、狭くなっている場所から「押し込められた口」のように見えた為「押口」と呼ばれた。
7	堅苔沢	かたのりざわ	鶴岡市・堅苔沢の地名は、江戸時代初期には「堅海苔沢」と記され、その後「片乗沢村」を経て、明和7年（1770年）以降に「堅苔沢」と表記されるようになった。由来は、堅い岩盤の地形で、苔むした沢地から付いたと思われる。
8	葉畑	からむしばたけ	鶴岡市・由来は、葉（イグサ）や雑草を意味し、草深い場所や野原のような場所を指し、「畑」は農耕地を指す。
9	九百疋	きゅうひゃくきろ	鶴岡市・由来は、水力発電所の建設と深く関連した地名で、1914年（大正3年）に建設された「笹ヶ峰発電所」の最大出力が当時の大規模な900キロワットの出力で、これを記念して命名された地名。
10	転目木	うつろぎ	鶴岡市・由来は、転びやすい地形などで木が密集している地域
11	七五三掛	しめかけ	鶴岡市・由来は、神社仏閣などで使われる注連縄（しめなわ）に由来する。
12	茅原	ちわら	鶴岡市・由来は、かつて茅（かや）が茂る原野であった事に由来する。茅は、昔の屋根を葺く材料として重要な材料。
13	手向	とうげ	鶴岡市・由来は、人々が山を越える際に峠で手を向い合わせ、無事を祈った事に由来する。この地域は、出羽三山信仰の中心地として栄え、多くの宿坊が立ち並ぶ門前町として歴史を刻んできた。
14	外内島	とのじま	鶴岡市・由来は、中世に赤川が乱流していた地域に多く見られる「島」のつく地名の一つで、赤川の旧称である外川と内川の間にできた島という説や、戸内大夫（神主）との関連がある。
15	茨新田	ばらしんでん	鶴岡市・由来は明確ではありませんが、新田開発により出来た地名。

16	一日市通	ひといちどおり	鶴岡市・由来は、毎月1日に市場が開かれていたので付いた地名。
17	文下	ほうだし	鶴岡市・由来で有力な説は、弘法大師が赤川の上流から母に向けて手紙（文）を流した事に由来する。つまり「文を出した（ほうを出した）」が転じて「ほうだし」になった。
18	矢馳	やばせ	鶴岡市・由来は明確ではないが、矢を作っていた事や馬に関する由来なのと思われる。
19	無音	よばらず	鶴岡市・由来は、沼の竜神を怒らせないために音を立てなかったという説と、近所付き合いの悪い村を意味する説がある。
20	早田	わさだ	鶴岡市・由来は、一般的に「早く稲が実る温暖な土地」という意味や、「小平地」または「岩礁」を指す「ハエ」を意味する言葉に由来する。
21	鶺鴒渡川原	うどがわら	酒田市・由来は、かつて新井田川が最上川に合流する東岸に位置し、亀ヶ崎城の南東にあたる地域を指していた。
22	生石	おいし	酒田市・由来は、生石神社に祀られている大きな岩や、兵庫県高砂市の生石神社からの分霊勧請に由来すると思われる。
23	古荒新田	こあらしんでん	酒田市・由来は、「廃田（小荒）」を復旧して開墾した「新田」である事が由来。
24	砂越	さごし	酒田市・由来は、かつて船着き場があり、酒田の古名である「砂潟（さかた）」を越えていく場所であった事に由来する
25	注連石	すみいし	酒田市・由来は、山伏の修験場であったことや、神仏習合の信仰に由来すると推測される。
26	局局	つびねつぼね	酒田市・由来は諸説あり、一つは、6世紀に出羽三山修験道を開いたとされる蜂子皇子に付き従った「局の方」がこの地に留まり、庵を結んで開村したという伝説と、「局」という言葉が狭くて低い土地、つまり「局地」や「窪地」を指す地形であるという説がある。
27	棘田	ばらだ	酒田市・由来については不明ですが、「棘（いばら）」の字から創造では、いばらの木が茂る地域でついた地名と思われる。
28	茨野新田	ばらのしんでん	酒田市・由来は、新田開発でついた地名。
29	遊擦部	ゆするべ	酒田市・由来は、川の流れによって砂が揺り動かされた場所。
30	四ツ興野	よつごや	酒田市・由来は、四方向に手つかずの荒れ地を切り開いて人が住み始めた場所に由来すると思われる。
31	転坂	うどざか	新庄市・由来は、昔、一人の僧侶がこの地を旅していた際、険しい山道に差し掛かり転んでしまったが、不思議なことにケガひとつなかった。そこには古びたお地蔵様が立っていたので、お地蔵さまが危険を教えてくれたと感じこの場所を「転坂」と名付けたという伝説がある。
32	櫛山	たもやま	村山市・由来は、14世紀の南北朝時代には既に存在し、浄土真宗の僧侶である「存覚」の「袖日記」に、親鸞の直弟子であ

			る信明が「タモ山に住した」と記された事に由来。
33	行川	なめりがわ	村山市・由来については確定できませんが、諸説あり、その地域に滑らかに流れる川があったので付いた説や「なめくじ」が生息していたからなどがある。
34	反田	そんだ	村山市・由来は、傾斜地にある田を指し、他にも共同で荒地を開拓し、その功績の応じて参加者に「三反」や「五反」と言った面積の田が分配された。
35	驚滝	おんだき	村山市・由来は、昔その滝の美しさと迫力にそこに由来した人々が驚いた事から行いた地名。
36	弓田	ゆんでん	村山市・由来は不明ですが、可能性として「弓」のように湾曲した地形の田や、弓矢を製造していた土地、弓の名手が住んでいたなどが考えられる。
37	五十沢	いさざわ	村山市・由来は、東部の山間部に多くの沢がある事に由来するとされている。
38	大鳥居	おんどり	村山市・由来は、かつてこの地に大きな鳥居があった事に由来する。
39	一日町	ひとかまち	東根市・由来は、かつて定期的に市場が開かれていた事に由来する。
40	山刀伐	なたぎり	尾花沢市・由来は、山仕事や狩りの際に被る「なたぎり」という冠り物の形に、峠の形状が似ている事に由来する。
41	梨郷	りんごう	南陽市・由来は、洋梨の産地であった事に由来する可能性が指摘されている。
42	海味	かいしゅう	西村山郡・由来については不明ですが、山間部に位置するが「海」の字が使われている事に特別な由来があると思われるこの地名は元徳4年（1332年）の木像五輪塔の銘文に信性禪尼により村名が記されており、古くから集落は存在していた
43	左沢	あてらざわ	西村山郡・由来には諸説あり、主なものは、最上川を基準に「あちらの沢」と呼んだ説と、山岳信仰の山から見て左手に見える沢を指した説、アイム語に由来する説がある。
44	猪子	いのこ	東田川郡・由来は不明ですが、猪子の地名はいくつかあり、猪が神の使いとして崇められ付いた地名や、五穀豊穡や子孫繁栄を願って付けたという説もある。
45	高豆蔻	こうずく	東田川郡・由来は、はっきりしませんが、薬用植物の「豆蔻」に由来するという説がある。高豆蔻は、高津久・高豆久・高豆荳蔻などの表記されていた。
46	苳	のぞき	東田川郡・由来は、修験者が崖から宙中吊りになって下界を覗く修行を行い、のちに立派な位に及んだ事に由来する。
47	瀧	みづま	東田川郡・由来は、「水がたまる場所」や「池、沼」という意味
48	主計田	かずいだ	東田川郡・由来については不明ですが、「主計」という役職の者が所有していた地域と思われる。

49	提興屋	ひさげこうや	東田川郡・由来は、天正末期（1573年～1592年）に田尻村から九朗左衛門、左京太夫、鍛冶の3軒の家がこの地に移り住んだ事に由来する。
----	-----	--------	---



NO	地名	読み方	由来
1	蝦貫	えぞぬき	福島市・由来は、古代の蝦夷（えみし）が住んでいた地域に由来する。
2	信夫山	しのぶやま	福島市・由来には諸説あり、主な説としては、山に生えていた「篠（しの）」という植物に由来する説と、特有の「忍ぶ草（しのぶぐさ）からきている説、そしてアイヌ語の（シヌブ）が転訛したという説がある。
3	微温湯	ぬるゆ	福島市・由来は、厳選温度が約32度と低く「微かに温かい湯」である事に由来する。

4	寄合水	せせらぎ	福島市・由来は、水が寄せ集まってせせらぎの音がしている事に由来する。
⑤	一箕	いっき	会津若松市・由来は、一箕山にある八幡神社の社殿を造営する際に、領民が箕(み)で土を運び築いた事に由来する。
6	神指	こうざし	会津若松市・由来は、平安時代前半(860年)に源融(みなもとのとおる)の家来が山王権現に安住の地を求めた際、夢のお告げて「北の林に香木がある場所を開墾せよ」と指し示された事に由来する。当初は「香指」と表記されていたが、のちに「神差」を経て「神指」と書くようになった。
7	飯寺	にいでら	会津若松市・由来は、室町時代初期に、会津に拠点を移した葦名氏7代当主葦名直盛が本光寺で食事をした事に由来する。
8	安積	あさか	郡山市・由来は、大和朝廷時代にこの地域を治めた「阿尺国造(あさかのくにのみやつこ)の「阿尺」が由来とされている。のちに「安らぎを重ねる」という意味を持つ「安積」という縁起の良い漢字に改められた。
9	芋浸場	おしてば	郡山市・由来は、芋の栽培や加工に関わる場所から付いたと思われる。この地名は元禄9年(1696年)には登場している
10	河内	こうず	郡山市・由来は、一般的には川の内側や川に囲まれた地域を指す地名。
11	燧田	ひうちだ	郡山市・由来は、一般的には「燧石(ひうちいし)や火打ち道具に関係があると思われる。火打石の産地かも。
12	内郷綴町	うちごうつずら まち	いわき市・由来は、鎌倉時代末期には「つつらを」と記され、江戸時代に「綴」と表記される。この「綴」は、ツヅラフジなどのつる草が生い茂る小高い土地を意味する。
13	神下	かのり	いわき市・由来は不明ですが、「神」に関連する場所の下、あるいは「神谷」の下の地域を指す可能性もある。
14	神谷	かべや	いわき市・由来は、鎌倉時代初期にこの地を治めていた有力者の神谷氏(かべやし)に由来する。神谷氏は平安時代に岩城氏から分かれたという伝承もある。
15	嘉睦家	かむか	いわき市・由来は、昔から「かぼけ」という呼び名で親しまれた地域で、江戸時代以前の古文書に「嘉保毛」や「賀保毛」などと表記される。その後に「嘉睦家」となった。意味としては、川の合流点や曲がり角など、地形の特徴を表す言葉が元になっている説がある。
16	塊坪	くれつぽ	いわき市・由来については不明ですが、地形や土地利用に由来する地名と思われる。
17	扱屋	こまや	いわき市・由来は不明ですが、歴史的には「特定の場所で物品を扱う」地を指し、昔の宿場町や港町、街道の分岐点などに多く見られる地名。
18	差塩	さいそ	いわき市・由来には諸説あり、主なものは高い山から海が見え

			た為「潮を差配する」もしくは「磯を指す」から転訛した説と、会津地方への塩の輸送拠点であった為「塩を差配する」から転訛した説がある。
19	旅人	たびうど	いわき市・由来は、明治6年(1873年)に「入旅人村と出旅人村が合併」して「旅人村」となったという。
20	仲間町	なかけんちょう	いわき市・由来は、1897年の字名変更により、福島町北端の一部と腰浜村南西端の一部が仲間町と呼ばれるようになった
21	勿来	なこそ	いわき市・由来は、古語で「来るな」を意味する「な来そ」に由来し、これは東北地方の蝦夷の南下を防ぐために設置された「勿来関」に由来する。
22	荷路夫	にちぶ	いわき市・由来は、物資を運ぶ道路があったことに由来する。
23	羊栖平	にじきだいら	いわき市・由来は、水生植物の「ヒツジグサ」が群生している事に由来し、「平」は、なだらかで平坦な土地や台地を指す。「ヒツジグサ」は、未の刻(午後2時頃)に花が開花する事から名づけられた。他に羊が放牧されていたからや、縁起の良い「羊」や植物の「栖」を当て字にした説がある。
24	馬上	もうえ	いわき市・由来は、いわき市の地形が「馬の背」に似ている事に由来する。西側の連続した地形が「馬の上」を、東側の分断された地形が「馬の目」や「玉」を表していると言われる
25	笈川	おいかわ	喜多方市・由来は、以前に笈川氏が住んでいた事に由来。
26	一竿	いちう	喜多方市・由来については不明。
27	諷坂	うつさか	白河市・由来については不明。
28	双石	くらべいし	白河市・由来は、双石明神社の神体である一尺と九尺に二つの石に由来する。この地名は「競石」とも表記される。
29	合戦坂	こうせんざか	白河市・由来は、天正7年(1579年)に佐竹義重の軍勢と白川結城義親の軍勢が戦った古戦場に由来する。
30	外面	とづら	白河市・由来は、元々「外の方角」や「外側の地域」を意味する言葉と思われる。
31	疣石	いぼいし	相馬市・由来は、その石に触れるとイボが治るという伝説がある。昔々、ある女性がイボで悩んでいました。ある日道端で見つけた石に触れたところ不思議とイボが消えたそうです。その石が「イボ石」と呼ばれるようになり地名となった。
32	小田原	おだのはら	相馬市・由来については不明ですが、相馬市の小田原地名は豊臣秀吉の小田原の陣と関連があるのではないかとと思われる。
33	百槻	どうづき	相馬市・由来は、文禄2年(1593年)にこの地に住み、采地を持っていた「百槻右兵衛」という人物に由来する。
34	日下石	につけし	相馬市・由来は、文禄2年(1593年)の総士禄高調に「日下石新左エ門」という人物が住んでいた事に由来する。
35	柚木	ゆぬき	相馬市・由来は、昔、殿様が通りかかった時、小川に「柞(ゆず)の木で橋を架けたことから「柞木橋」と名付けられ、その

			後に「柚木村」となったという。
36	本笑	もとわろう	相馬市・由来については不明。
37	栲内	うずきうち	田村市・由来は不明ですが、「栲」は「ハゼノキ」や「ウルシ」などの特定の樹木を指し、染料やロウの原料として利用されてきた歴史がある。もし、この地に多く自生していれば地名の由来になった可能性が考えられる。
38	諷土	うどうつち	田村市・由来については不明。
39	轟淵	おとろぶち	田村市・由来は、水が勢いよく流れ、大きな音を立てている滝つぼや急流の深い所に由来する。
40	神俣	かんまた	田村市・由来は不明ですが、以前は鹿俣久四郎が築城した「神俣城（鹿俣城）」が置かれていた事に由来する。
41	拾貫内	ちこうち	田村市・由来は、「貫」は中世の貨幣の単位で、土地や価値を「貫高」で示していた。「拾貫内」という地名は、その土地が「拾貫文」相当の経済的価値を持っていて、年貢等に課されていた。
42	鐙摺石	あぶすりいし	二本松市・由来は、馬の鐙（あぶみ）が擦れた石があった事に由来する。
43	江井	えねい	南相馬市・由来については不明。南北朝時代よりある地名。
44	榎原	じさはら	南相馬市・由来は、昔この地域にトチノキが自生していた地域から着いたと思われる。
45	雫	しどけ	南相馬市・由来は不明ですが、「雫」の意味は、清らかな水が湧き出る所をさす。
46	深野	ふこうの	南相馬市・由来は、中世に館があったことに由来する。
47	米々沢	めめさわ	南相馬市・由来ははっきりしないが、この地名から水が豊富で、米だけでなく農業が盛んな土地を示した地名。
48	椿畑	かっぱたけ	伊達市・由来は、椿の木が自生していた地域が由来。
49	禹父山	ぐふさん	伊達市・由来は、昔話で貧しい親子がおり、お父さんの病気のかかり、回復を願う子どもは楽になるという兔の胆を求めて山に入りました。しかし、なかなか兔が見つからず途方に暮れていたら白い兔が現れて、自分の胆を与える事にしました。それをお父さんに飲ませると、みるみる回復した事から、兔父山と呼ばれるようになったという伝説。
50	不羈拗	ふきおう	伊達市・由来は、アイヌ語の「フキ（ふきのとう）」を表し、「ア」は場所やあるものを意味するので、フキが自生する場所
51	水滴	みつたり	伊達市・由来については不明。
52	狸首岡	りしゅこう	伊達市・由来は不明ですが、推測で狸が多く生息している地域や地形が似ている事かと思われる。
53	霊山	りょうぜん	伊達市・由来は、慈覚大師円仁が釈迦が修行したインドの霊鷲山（りょうじゅせん）にちなんでなす桁という。
54	懸鉄	かんかね	本宮市・由来については不明

55	桑折	こおり	伊達郡・由来は諸説あり、有力なものは古代に郡役所（郡衙）が置かれ「郡（こおり）」と呼ばれていた説や、かつて「桑島」と呼ばれていたが、阿武隈川の氾濫を避けるため、諏訪明神の神託により「桑折」に改められたという説がある。
56	伊達崎	だんざき	伊達郡・由来は、「伊達」という地名が伊達氏に由来し、「崎」は地形的な特徴を示している。
57	五木内	じゃくじ	伊達郡・由来については不明。
58	野乾壇	けげんだん	安達郡・由来については不明ですが、乾燥した段々上の土地の境目と推測できます。
59	餉沢分	かるいさわぶ	耶麻郡・由来については不明ですが、戦国時代から存在した地名で、小田原北条氏の文書にも記載されている。
60	嵐ヶ平	そがとう	耶麻郡・由来には諸説あり、地形からねずみのような地形の丘陵地帯で、小さな起伏やこんもりとした場所が連なっている場所や、ネズミが多く生息している地域、ネズ（ネズミサシ）の木が自生している地域だったなどの説がある。
61	隕下	どったり	耶麻郡・由来については不明ですが、想像ですがその昔隕石が落下してきたなどはロマンがあつていい地名かも。
62	塔の崩	とうのへつり	南会津郡・由来は、塔のようにそびえ立つ岸壁の形状に由来。この独特な景観は、大川が百万年もの歳月をかけて浸食と風化を繰り返して形成されたものです。
63	木賊	とくさ	南会津郡・由来は、この地域に植物の「木賊（とくさ）」が群生していた事に由来する。「木賊」とは、山野の湿地に生育する常緑性のシダ植物で、硬くざらざらした茎は、昔は物を磨く砥石やサンドペーパーのように使われた。
64	藤生	とうにゅう	南会津郡・由来については不明。
65	会津坂町	あいずばんげまち	河沼郡・由来は、傾斜地の下に位置する集落である事に由来
66	柳津	やないづ	河沼郡・由来は、只見川の河岸に3本のヤナギの大木が茂り、船やいかだの重要な発着所であった事に由来する。
67	行	なの	大沼郡・由来については不明。
68	博目貫	ばくめき	大沼郡・由来は、昔から非常に豊かな土壌で、農作物が良く育ち、住民から暮らしやすい場所だった事から「ここは素晴らしい」という意味で付いた地名。
69	踏瀬	ふませ	西白河郡・由来は、かつて奥州道中の宿駅として栄え、元々は西方の二本栗にあった集落が、街道の開通に伴い現在の場所に移住した事に由来する。
70	甲子高原	かしこうげん	西白河郡・由来は、1384年に甲子温泉が発見された年が干支で「甲子（きのえね）」であった事に由来する。
71	鶴生	つりゅう	西白河郡・由来は諸説あり、鶴が多く飛来した地域や、美しい水の流れ（生＝おい）があつた説など。
72	大拱	おおぬかり	東白川郡・由来は、「拱（あばき）」とは山と山の間を開墾して

			できた平の土地を指し、「大」は大規模なという意味。
73	轡取	くつわとり	石川郡・由来については不明ですが、「轡（くつわ）」は馬の口につける道具で、手綱を捌くための道具。
74	蒜生	ひりゅう	石川郡・由来は、明応5年（1496年）に推定される文章に「蒜生政広」という人が記されている事から、人名に由来するものと考えられる。
75	鴛子	とうのこ	石川郡・由来については不明ですが、文禄3年（1594年）の蒲浦領高目録には「塔之子」と記されている。
76	躰田	むくろだ	石川郡・由来については不明。
77	竹貫	たかぬき	石川郡・由来は、中世にこの地を治めていた竹貫氏に由来する
78	雁股田	かりまんだ	田村郡・由来は、平安時代後期の話で、源頼義が合戦のためこの地を訪れた際に食料が尽き、家臣たちが飢えそうになっていた時に、突然雁が飛んできて矢に当たり田んぼに落ちてきた。家臣たちはその雁を食料として命をつないだ。そこで「雁股田」という地名が付いたという。
79	舞木	もうぎ	田村郡・由来は、直毘神社の境内にあった大きなクヌギの木が、強風で空に舞い上がった事に由来する。
80	葛尾	かつらお	双葉郡・由来は、信州の葛尾城から落ち延びた松本氏が、故郷の城の名「葛尾」をこの地に名付けた事に由来する。
81	赤宇木	あこうぎ	双葉郡・由来は、「ウツギ」という植物に由来する。
82	塩浸	しおびて	双葉郡・由来は不明ですが、海水が侵入する河口域の低地が由来か。
83	数嶮洞	すけんとう	双葉郡・この地名は、朝鮮王朝時代の歴史が深く、もとは「水峴（すいけん・スヒョン）」と呼ばれた。文禄・慶長の役後に多くの人々が苦難の経験したことから、「スヒョン」の音訓を採って「数嶮洞」と改めたという。
84	小埜	こばな	双葉郡・由来は、小さく小高い土地という意味。
85	古駅	ふるじゅく	双葉郡・由来については不明。
86	鴻草	こうのくさ	双葉郡・由来については不明ですが、コウノトリや大きいや広いという意味もある。
87	両竹	もろたけ	双葉郡・由来は不明ですが、隣接する境界に植えられた「並松」が「境松」として機能していた事から、二つの地域を分ける竹や木に由来すると思われる。
88	麦撫	むぎつき	相馬郡・由来は、古代に麦の栽培が盛んだったことに由来する。古代の農業と集落形成で、麦は米と同じく重要な食糧源で、特に水田の少ない地域の重要な作物として栽培されていた

制作・編集にあたり、インターネットの「ウィキペディア」・AI データーを活用して作成しています

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会 （ふるさと市原をつなぐ連絡会 会員）

連絡先 090-3545-1113